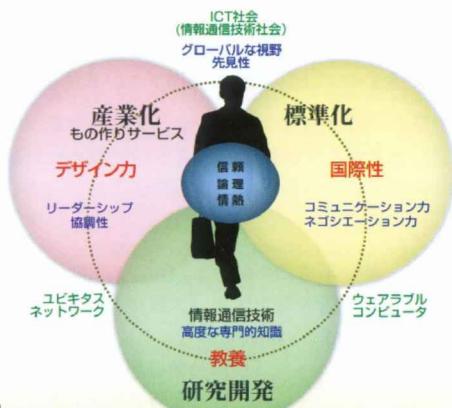




# 滝電

2007. 4 No. 28



「先端通信エキスパート養成プログラム」

イメージ図

「ICT社会=グローバルな競争社会」で活躍できる人材

## 目 次

会長ごあいさつ（鈴木 育）	1	会員の方々のご活躍	23
講演会からの話題	2	教室情報	24
話題	4	卒業者・修了者就職先	26
母校のニュース	6	滝電会役員	28
新研究室紹介	11	支部連絡先	29
退官された先生方の近況	13	同窓会だより	30
卒業生の近況	15	滝電会だより	32
学生の声	20	クラス委員	39

大阪大学工学部電気系同窓会

滝電会

ホームページ : <http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

平成19年4月

## 平成19年度大阪大学濬電会総会・懇親会ご案内

濬電会会长 鈴木 胖

拝啓 陽春の候 会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、平成19年度濬電会総会ならびに懇親会を下記の通り開催いたします。昨年は130名を超える卒業生や先生方が出席され、大盛況でした。母校の先生方を交えて、先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ、情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画されるのもよろしいかと存じます。

昨年同様、本年も講演会を企画いたしました。最新の話題についてご講演いただく予定ですので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

敬具

### 記

日 時：平成19年6月1日（金） 17:30～21:00

会 場：新阪急ホテル（大阪市北区芝田1-1-35、Phone : 06-6372-5101）

次 第：1. 講演会 17:30～18:30 会場「花の間」

「自律分散の思想と技術」

大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻 教授 熊谷 貞俊 先生

2. 総会 18:30～19:00 会場「花の間」

3. 懇親会 19:00～21:00 会場「紫の間」

会 費：学部卒業平成10年以降の方 7,000円

学部卒業平成9年以前の方 10,000円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎いたします。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のはがきにて、来る5月21日（月）までにお知らせください。

### 表紙について

表紙の“濬電”は、熊谷信昭大阪大学元総長（通信・昭和28年旧制）の揮毫によるものです。写真の「先端通信エキスパート養成プログラム」（プログラム実施責任者 河崎善一郎教授（通信・昭48））は、創造性豊かな若手研究者養成のための重点的支援に向けて文部科学省が公募を実施した「魅力ある大学院教育」イニシアティブに、平成18年度に採択され、2カ年の予定で実施中のプログラムです。

## 会長ごあいさつ

濬電会会長 鈴木 肥  
(電気・昭33)



会長を拝命してから早くも2年間になろうとしています。この6月の総会で会長の役をシャープ（株）常任顧問の三坂重雄氏にバトンタッチいたします。

濬電会本部の主な事業は、例年6月の第1週・金曜日に開催される総会（講演会・総会・懇親会）、秋の見学会、3月末の電気系卒業祝賀・謝恩会の開催、年1回の会誌「濬電」の発行、そしてホームページの運用です。これらの事業を企画・実行するために本部に役員会を置き、年に4回程度役員会を開いています。現在の役員会のメンバーは34名で、大学と企業がほぼ半々です。濬電会の活動を支える最も重要な仕事は広義の会員管理（会員データーベースの管理、会費収納状況の管理、新規会員の獲得等）です。これまで会員データーベース管理については役員の中の大学の先生方、学生アルバイトそして安井さんに大変なご苦労をかけてきましたが、負担が大きいので、昨年から会員データーベース管理と会費収納状況管理の基本業務をアウトソーシングすることにいたしました。この引継ぎの過程で、会費免除となっておられる会員の方に会費を請求してしまうなどご迷惑をおかけしました。あらためて深くお詫び申し上げます。また、誤請求で頂いてしまった会費をご寄付いただいた方々には厚くお礼を申し上げます。

濬電会には九州、四国、中国、北陸、中部、東京の6つの支部があります。この2年間、支部の総会についてはできるだけ早めにご連絡をいただき、日にちが重複する場合は調整をお願いして、そのすべてに出席することができました。各支部では総会に付随して見学会、講演会、懇親会などを開いておられます。その際に同行の先生（総務幹事あるいは会計幹事）から、独立法人化後めまぐるしく変わる大学、そして電気系の近況を紹介していただきました。地方における濬電会ゆかりの卒業生の活躍ぶりや会員の絆の強化に役員がご苦労されている様子を良く知ることができました。基礎工学部電気系の出身者が参加している支部もあり

ます。本部、支部の双方にとって生きた情報の交換は役に立つことが多いと感じました。

私の本務は兵庫県立大学副学長（研究担当）で、産学連携センター長、知的財産本部長、学術総合情報センター長を兼務しています。濬電会の本部役員会や支部総会に出席するたびに産学連携の状況や知的財産管理の問題点などについて有意義な情報やご意見をいただきました。これも会長としての役得の一つと感謝しております。

会員の方からご要望の多い会員名簿の発行については、プライバシー保護の観点からいろいろと議論があり、これまで見合わせてきました。しかし名簿の発行は同窓会の生命線であると位置付け、このたび濬電会としてのプライバシーポリシーを定め、これにしたがって名簿を発行することにいたしました。私の任期中には間に合いませんが本年中には名簿を希望する会員の方々のお手元にお届けできる予定です。

平成17年8月に「大阪大学同窓会連合会」が結成されたことは「濬電」27号でご報告いたしました。連合会の会長には大阪大学元総長の熊谷信昭先生が就かれました。先生は長年、工学部・工学研究科の同窓会「(社) 大阪大学工業会」の会長も務めてこられました。平成18年6月からその後を受けて私が工業会会长の任に就いております。濬電会、大阪大学工業会とも会費を納入する会員が年々減少するという重大な課題を抱えています。役員の方々と何とか打開策をいろいろ模索しておりますが、決め手はなく、地道な努力の積み重ねしかないよう思います。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後に、この紙面を借りまして、この2年間、濬電会の活動を盛り上げていただいた会員、役員の方に厚くお礼を申し上げます。次期会長の三坂氏はこの2年間副会長としてほぼすべての役員会に出席され、主要行事や支部総会にもご都合のつくかぎり積極的に参加されました。安心してバトンタッチをいたします。

## 講演会からの話題

#### 需要家サイドから見たCO<sub>2</sub>削減

大阪大学  
大学院工学研究科  
電気電子情報工学専攻 教授  
辻 豊一郎  
(電気・昭41)



京都議定書が発効し、わが国は6%のCO<sub>2</sub>排出削減を達成すべくこれまでにも増して対策を強化する必要がある。一般的にはCO<sub>2</sub>排出削減は、工場や発電所といった産業・エネルギー転換部門で行われるイメージが強いが、近年のエネルギー消費は、産業部門ではすでに横ばい状態であるにもかかわらず、民生部門で増加し続けており、民生部門での消費削減の重要性はますます高まっている。つまり、需要家各自がこぞってCO<sub>2</sub>削減に関わりあわなければ、6%の削減など実現の見通しは立たないといつても過言ではないだろう。

辻研究室では1998年から住宅におけるエネルギー消費に関する計測調査を行ってきた。この計測調査は、冷蔵庫、エアコン、テレビといったエネルギー消費機器別に30分ごとのエネルギー消費量を明らかにするという、これまでにない規模と詳細さを持つ調査で、これまでの8年間で一戸建て住宅87軒、集合住宅73軒の合計160軒の、それぞれ一年以上に渡るエネルギー消費データを収集することができた。また、電力と都市ガスの両方に関する消費データ収集は一般の事業者ではなかなか実施しにくく、大学が中心となった計測プロジェクトならではのデータベースが構築できた。資金は未来開拓学術研究推進事業、ならびに阪大フロンティア研究機構におけるマッチングファンド（関西電力・大阪ガス）により提供された。

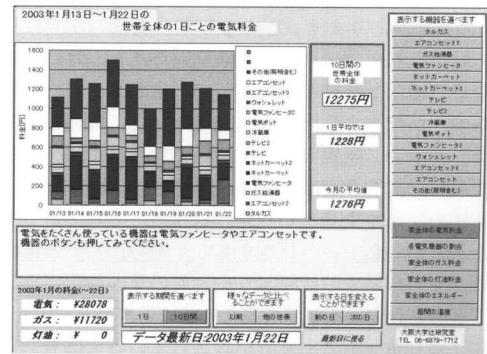
計測データから冷房・暖房などの用途別に一日のうちどの時間帯でどの程度消費されるかを表す日負荷曲線が得られるなど、住宅のエネルギー需要構造が明らかとなった。日負荷曲線からはエネルギーが日々の生活に伴い、朝と夕方以降に多く消費する様子がよくわかる。例えば冬には朝方のエネルギー消費が夕方以降と同じ程度まで増加するが、これは暖房のためである。また、年間エネルギー消費を用途別で平均的に見ると、

①給湯、②暖房、③照明その他、④厨房の順に消費量が多く、冷房分は極めて少ない。一戸建て住宅と集合住宅とでは、エネルギー消費の状況は類似しており、その違いは主として広さに関連する照明分等である。

エネルギー消費の状況は各住宅本当にまちまちであるが、とくに給湯用・暖房用エネルギー消費については各住宅間のバラツキが極めて大きい。給湯分に関しては人々のライフスタイルそのもので、なかなかその多寡の要因を定量的に明らかにすることは困難であるが、暖房についてはそのバラツキを説明しようと試みた。その結果、暖房機器使用時間、住宅の室温維持特性（断熱性と関係が深い）、使用機器の種類（エアコン、ガスファンヒータ、コタツなど）、機器効率により変動分のおよそ9割が説明できることが明らかとなっている。

これらのことから住宅の断熱性向上に努めること、効率の良い機器に置き換えることなどが省エネ・CO<sub>2</sub>排出削減対策として有効であることが明らかとなつたが、もう一つ、人間の省エネ行動による削減も有効であろうと考え、エネルギー消費情報提供システムを開発し、その効果についても実際に設置して確認した。このシステムでは、前日までの当該住宅のエネルギー消費が、棒グラフや円グラフなど適切な形で住人に提示される。たとえば表示画面でテレビのボタンを押すと、テレビの消費電力が画面に示される（図参照）。このシステムを20軒余りの住宅に設置したところ、約15%程度の省エネ効果があることが確認できた。これからはこのモニターを標準仕様に含めたものも現れるのではないかと期待している。

断熱性の良い家に住み、高効率の機器を使用しさらにモニターで不必要な消費を抑制するなどライフスタイルを見直す、この3つがCO<sub>2</sub>削減には必要である。



## 講演会からの話題

### 新結晶と産業にもたらすもの

大阪大学  
大学院工学研究科  
電気電子情報工学専攻 教授  
佐々木 孝友  
(電気・昭42)



光・電子分野における新産業は常に結晶を基盤として進展してきたといつても良い。その代表がシリコン結晶であり、またその他にガリウムヒ素、ガリウムリン、水晶、リチウムニオベートラがある。ここでは、当研究室における最近の光・電子分野、医用分野用新結晶の開発状況およびその応用および産学連携の状況についての報告を行った。

#### ①波長変換結晶による全固体紫外レーザー光源とその産業、医学応用

半導体発光素子の開発により現在、赤外、可視領域の光の発生は可能になってきたが、紫外領域は未だ困難であり、特に超精密加工用の高性能な紫外光は波長変換技術による所が大きい。波長変換技術は長波長のレーザー光を結晶を通して短波長に変えるもので、数個の結晶を通過させることで赤外光から200nmを切る紫外光にまで変換できる。結晶の変換効率が高くなれば実用化できない。当研究室では平成7年に紫外レーザー光を最も効率良く発生する非線形光学結晶 $\text{CsLiB}_4\text{O}_{10}$  (CLBO) を開発したが、この高品質化により三菱電機との共同研究で世界最高出力42W (波長: 266 nm) の紫外レーザー光発生に成功している。これは現在、次世代の半導体微細加工装置用光源として実用化されようとしている。また出力200mW、波長200nmを切る紫外光がニコンとの共同開発で開発され、医学部との共同研究で眼の近視遠視の矯正への研究が行われている。また次世代半導体マスク欠陥検査装置用にも用いられようとしている。

この他にもGdYCOB、CBO、KAB、BABFなどの紫外用新結晶の開発もされている。

#### ②タンパク質結晶化技術

現在治療困難な疾患には微量タンパク質が関わっていることが多いことが見つけられてきている。そのための創薬にはこれらタンパク質の構造を知る必要があり、タンパク質の結晶が必要となる。必要な結晶の大きさは100μm程度であるが、タンパク質は分子量が極めて大きくその結晶化が困難である。当研究室ではCLBO結晶を開発した時の溶液攪拌が結晶化に極めて重要であることを見つけた。またフェムト秒レーザーの照射により効率よく結晶化することを見だし、タンパク質結晶化の進展に大きく寄与できた。この技術を基に大学発の創薬用結晶製作ベンチャー会社「創晶」が平成17年に立ち上がり、現在製薬企業24社から受注している。

#### ③GaNバルク単結晶育成技術

現在世界中で信号機やディスプレーなどに用いられているGaN青色発光素子は日本で開発された。これはデバイスの基板としてサファイアが使用されており、格子定数が異なることから転位などの欠陥が多く、効率、寿命の点で改善の余地がある。またシリコンに代わるハイパワートランジスタが自動車産業その他で大きく期待されている。これらの素子には基板として素子と同じ材料であるバルクのGaN単結晶が必要となってきた。当研究室ではNaフラックスを用いた液相エピタキシャル法により、欠陥の少ない高品質GaN結晶の育成を行っている。溶液からつくる結晶は極めて転位が少ないことが分かり、現在、多くの会社と共同研究で、実用化のための直径2インチの大型結晶製作に取り組んでいる。

#### ④テラヘルツ波発生

テラヘルツ波（ミリ波と赤外線の間の波長を持つ電磁波）は光源として、今まで未開発の領域であったが、近年世界中でその研究が盛んになってきている。テロ対策や新規医用検査に新しい波長領域であるテラヘルツ波を用いようとするものである。赤外、可視のレーザー光を結晶に照射、発生させる方法が盛んであり、このための結晶開発を当研究室で行っている。有機のDAST結晶は効率、発生波長範囲から有望視されており、高品質結晶の育成研究を行っている。数年先にはこの分野の実用化が盛んになるものと思われる。

## 話題

### フラッシュメモリの開発について

東芝マイクロエレクトロニクス㈱  
デザインソリューション統括部  
システムLSI設計部  
主査  
伊藤寧夫  
(電子・昭52・M54、電気D57)



デジタルカメラ、携帯音楽プレーヤー、メモリカードなどに使用されているNAND型フラッシュメモリは、大容量を低成本で実現できるメモリとして、最近用途が急速に拡大しています。フラッシュメモリとは、電気的に一括消去・再書き込み可能な半導体メモリであり、電源を切っても記録した内容が消えない不揮発性メモリの一種で、高速アクセスに適したNOR型、大容量化に適したNAND型など幾つかの種類が知られています。

NAND型フラッシュメモリの研究開発に携わった一人として、その歴史を少しひも解いてみます。東芝では、今から20年前の1987年にこのメモリの研究開発がスタートしました。我々は大容量フラッシュメモリの実現のために、セルピッチが半導体の微細加工と同じ最小幅で形成でき、大容量化に適する単純なメモリセル構造を提案しました。1991年に世界初の4MビットNAND型フラッシュメモリの製品を発表しましたが、その後の技術的諸問題を解決していく中で、酸化膜のトンネル現象を使った書き込み消去技術、書き込み後のメモリセル1ビットごとの閾値を精密に制御する技術、フローティング状態を用いた非選択セルの書き込み禁止方法など、ユニークな技術が確立されました。他にもプロセス、デバイス、製造、回路設計、応用技術において大小様々なアイデアが生み出され、それらが融合し、進化して行きました。

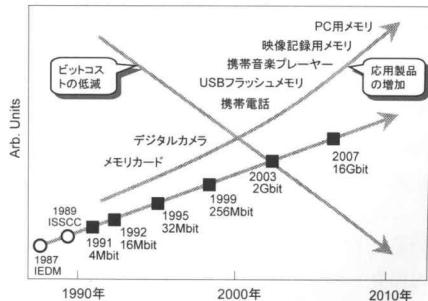
新技術の開発にこのように多くの人が挑戦してきましたが、しばらく時を置いてこの大容量のNAND型フラッシュメモリを引き上げて、新市場開拓に挑戦してきた人達が現れました。メモリとコントローラチップを組み合わせて小型軽量のメモリカードにするアイデアを実現した人達、デジタルカメラ、携帯電話、携帯音楽

プレーヤーなどの新商品への応用を考えた人達です。大容量化とビットコストの低減とともに、応用製品が増え、メモリの市場が急速に拡大しました。

現在、ビットコスト低減のためには、微細加工技術と多値技術の推進が成果を上げています。微細化は、セル同士を限界まで接近させるSTI（シャロー・トレーンチ素子分離）技術も大きく寄与しています。16Gビットの製品では、最小幅56nmの微細加工技術が使われていますが、さらなる微細化や多値化の研究開発が進められています。多値技術とは、1つのメモリセルに2ビット以上のデータを記憶させる技術であります。例えば2ビットの情報を記憶するためには、“00”、“01”、“10”、“11”的4値の状態に対応してメモリセルの閾値を設けるもので、同じ加工技術で2倍の大容量化が実現できます。また部品数を減らすため、他の様々なメモリチップも1つのパッケージに組み込んだMCP（マルチ・チップ・パッケージ）品が、多機能化が進む携帯電話を中心を使われています。さらに、一度に処理するデータを増して書き込み速度を高めることにより、大容量化と高速化を両立させています。

今後の動向として、大容量メモリに対するニーズはさらに高まり、用途も広がると考えられます。最近ではメモリカードに映像録画ができる小型軽量のビデオカメラも現れています。また将来的には、データの読み込みの高速性を生かし、瞬時に起動するPC用メモリへの用途も考えられています。今後もNAND型フラッシュメモリは、私たちの生活に必要な様々な情報を容易に保存、移動、編集できるメモリとして、また、より便利で快適な未来の新商品の基幹部品として、システムLSI（SoC）の発展とともに、重要な役割を担い続けて行くものと期待しています。

NAND型フラッシュメモリ、低成本化により応用製品増加



# 話題

## 電力自由化とガス会社

大阪ガス株  
エンジニアリング部  
電力ソリューションチーム  
マネジャー  
**山 口 誠**  
(電気・昭56)



電力自由化の進展のなかで、大阪ガスの電力分野への取り組みについて御紹介したいと思います。

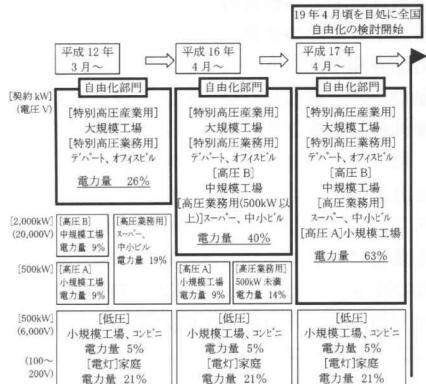
### 電力自由化

そもそも電力自由化とは、一般電気事業者（一般的電力会社）が地域毎に独占的に供給を行ってきた電力を、既存の電力会社以外でも自由に売買できるようにした、規制緩和の一連の動きのことです。

この電力自由化の一連の動きの概要は、以下のようになります。

- (1995年)・発電分野への新規参入が可能に（IPP事業）  
・ビル群など特定の地点を対象とした自営配電線による電力小売が可能に（特定電気事業）
- (2000年)・2,000kW以上で受電する需要家に対して新規参入者による電力会社の送配電線を使用する電力小売が可能に（特定規模電気事業）
- (2004年)・特定規模電気事業の範囲を2,000kW以上から500kW以上へと引き下げ
- (2005年)・特定規模電気事業の範囲を500kW以上から50kW以上へと引き下げ  
・日本御電力取引所の市場が開設

2000年以降の電力小売（特定規模電気事業）の範囲の拡大経緯をまとめると下図のようになります。



### IPP事業への取り組み

前述の通り、1995年の規制緩和で、電力会社へ電力を御売りするIPP事業が可能となりました。大阪ガスは、1996年7月、関西電力株の御供給事業（IPP事業）の入札で落札し、IPP事業に参入しました。IPP事業を推進するため、2000年6月に株ガスアンドパワーインベストメント（GPI）を設立しました。GPIは、1996年に落札したIPP事業用発電設備として西島エネルギーセンター（14.9万kW、G/T、C/C）を建設し、2002年4月から営業運転を開始し、関西電力株へ電力を御供給しています。

また、GPIは2003年3月には、中山共同発電株の船町発電所（14.9万kW、G/T、C/C、1999年運転）と、中山名古屋共同発電株の名古屋発電所（14.9万kW石炭火力、2000年運転）を取得しました。

この結果、国内IPP事業としては、合計45万kW規模となっております。一方、海外IPP事業でも、テナスカゲートウェイ発電所（84.5万kW 米国）、アモレビエータ発電所（75.5万kW スペイン）へ資本参加をしています。

### 電力小売事業への取り組み

2000年の規制緩和では、電力会社の送配電線を使って、大口需要家（2,000kW以上）に直接電力を小売することが可能となりました。これを受けて大阪ガスは、株NTTファシリティーズ、東京ガス株と共同で電力小売事業を行う、株エネット（NTT-F40%、TG30%、OG30%）を2000年7月に設立しました。この株エネットの小売事業用の発電設備として、大阪ガスは、LNG基地である泉北製造所と姫路製造所にそれぞれ1.8万kWのG/T、C/C（2002年6月運転）と4.9万kWのG/T、C/C（2004年6月運転）を建設しました。また、コーチェネレーションの余剰電力を電力小売に活用する電源コーチェネとして、GPIが宇治エネルギーセンター（G/T 6万kW級）を建設し、2004年10月に運転を開始しております。

ちなみに、2005年度のエネットの電力販売量は約420万MWhで、新規電力小売事業者14社中第1位です。

また、小売事業の拡大を目指して、泉北製造所内に、大阪ガス初の大規模発電設備を建設中です。この発電設備は、新規参入者が建設する小売用電源としては最大級のもので、27.5万kWのガスタービンコンバインドサイクルを4台設置し、合計出力110万kWとなる計画です。運転開始は2009年を予定しております。

一方、都市ガス事業にも自由化の波は押し寄せ、ガスの小売の自由化も進展し、電力会社によるガスの小売も行われております。

このように、私が入社した当時には想像すらできなかった状況に置かれているのが現在のガス会社です。このため、ガス会社にも電気技術者のニーズが高まり、津電会の会員も大阪ガスの中で着実に増えてきております。

# 母校のニュース

## 先端通信エキスパート養成プログラム

河崎善一郎専攻長

創造性豊かな若手研究者養成のための重点的支援に向けて文部科学省が公募を実施した「魅力ある大学院教育」イニシアティブに、「先端通信エキスパート養成プログラム」が採択され、具体的な活動を開始して半年が経過いたしました。最近になり、活動の成果が漸く目に見える形になって現れ始めております。その一方で、プログラムを実施する上で検討を要する課題も散見されるようになってきていることも事実です。プログラム申請時に掲げた目標を達成するためには、残り一年の折り返し点に差し掛かった現時点において、これまでの半年間の取り組みを省みて総括することが重要ではと考え、中間総括も兼ねここに溝電会報に報告させて戴きます。すなわち、

1. これまでの成果を踏まえた上での更なる飛躍
2. 必要とされる軌道修正の認識とその方向性の検討

を考える上で必要であろうと考えるからです。

現在取り纏めの中間報告書は、本教育プログラムに関わる全構成員、即ち教員、学生、事務職員が上記の観点に立って執筆しております。そもそも本教育プログラムを立案した教員側の意図は、絶対的に不足している「情報通信技術者・研究者」を輩出する国内唯一の教育・研究機関としての自負から、「世界のリーダーたりうるエキスパートとしての実力と自信を持った情報通信技術者・研究者を世に送り出すシステムを確立したい」と考えたところにあります。今や世を挙げてICT (Information and Communications Technology : 情報通信技術) 時代といわれ、ICTがなければ夜も日も明けないといった現状である事を考えますと、溝電会関係の方々には容易にご理解戴けると確信しております。さらにその技術の進化・進歩の速度はすさまじく、企業間の競争もまさに「生き馬の眼を抜く」がごときであります。そのような社会情勢に鑑み、「世界のリーダーを教育するとは」と考え、我々は「徹底した競争原理を導入し、徹底的に鍛えぬくべき！」との結論に達しました。

第二次大戦後、我が国は教育の機会均等・平等を旗頭として嘗々と教育システムの整備に邁進してきました。しかし、冷戦終結後の国際社会における激しい競

争にさらされる中で、平等主義の弊害も少なからず顕在化し、ある種の「歪」として我々の肩に重くのしかかっております。このような情勢を鑑み、我々は、平等主義を排して、優秀な学生には篤い教育を施し、より成長させるシステムを構築することにより、教育パラダイムの新天地を開くことができるとの逆転の発想に至ったのであります。とはいえ、単なる優秀な技術者・研究者が養成されたのであっては目的を達成できることにはなりません。百獣の王ライオンが、わが子を千尋の峪に突き落とすがごとく、競争の中で淘汰されてきた学生を選びすぐり、徹底的に鍛えるシステム、それが「先端通信エキスパート養成プログラム」の真髄なのであります。具体的には、上記目的達成のために、

1. 提案型研究プログラム
2. 先端通信教育ツールの開発と先端通信テクノロジー実習
3. 國際連携教育プログラム
4. コミュニケーションプログラム

の各プログラムを用意し、これらを融合的に実施するための融合教育実践センターも立ち上げております。即ち1は学生諸君に研究を提案して戴き、選ばれた提案には予算をつけ、実際に研究を遂行して戴くプログラムであり、2は文字通り、先端通信に直結する教育ツールの開発とその実習で、学生諸君が自らツール開発に関わるよう配慮されています。また3は、諸外国の関連研究者との交流を、学生諸君の留学も含め金銭的にも支援しようとするプログラムです。また1～3項を現実的に支えるのが、他人とのコミュニケーションを円滑に行いうる研究者の資質で、その能力を高めるべく、泊り込みの合宿を通して教育することとしているのが4項です。さらにこれらのプログラムを有機的に結びつけ、徹底した競争原理を導入することにより、所期の目的を達成したいというのが一同の願いであり、取り組みであると了解戴ければ、ほぼ間違ひはありません。

さらに、「先端通信エキスパートの輩出」を目的として本教育プログラムを着実に実施することは、国際社会における激しい競争にさらされる技術分野の教育・研究を担当されている他大学院の模範となるべき「魅力ある大学院教育プログラム」を作り上げることに直結していることにも言及しておきたいと思います。

## 企業の研究室が阪大のキャンパスに 「実のある産学連携をめざして」

阪大の「インダストリー・オン・キャンパス構想」により、新しく作られた産学連携システム「共同研究講座」についてご紹介します。

近年、多くの企業は製品の高機能・高性能化、低価格化や環境保全等の視点から技術イノベーションを実現し、国際競争力を高め、グローバル企業への成長を目指しています。しかしながら一企業の力では限界があり、M&Aや社外との連携が重要な企業戦略として積極的に進められています。その中で産学連携は長年の課題であり、期待された程の成果が得られているとは言い難いのが実状です。欧米の大学と比べると、個別の研究では日本の大学の研究力はすばらしいものがあり、企業が直面する個々の問題の解決には大変役立つてはいますが、新しい産業の創出や新しい商品コンセプトの創造に対しての社会や企業への貢献となると物足りなさを感じます。この課題を阪大がいち早く察知し、昨年、新しい産学連携システムとして阪大のキャンパスに企業の研究室に相当する「共同研究講座」を日本で初めて創設しました。社会や企業が、将来直面するであろう技術課題を真正面から受け止めて解決しようとする阪大ならではの姿勢の表れと感じます。文科省や経産省もこの新しい産学連携方式に注目しています。

そして、昨年7月に吹田キャンパスのフロンティア研究センタ内にコマツ他2社の専属の「共同研究講座」が設置されました。「コマツ共同研究講座」は専従の研究者として阪大から2名、コマツから私を含めた2名により構成された工学研究科直属の講座（図1、参照）で、建設機械に係わるイノベーションを実現する技術の基礎研究を実施しています。また、運営面から機械工学専攻にも所属しています。従来の寄附講座や共同研究とは異なり、企業が将来必要とする技術シーズに特化した研究課題を、大学と企業の研究者が既存の研究室から独立した一つの研究室で一体となって、柔軟かつ迅速に効率良く研究できるのが大きな特徴です。また、産学連携による人材の育成、ミスマッチのないリクルートの促進等も期待でき、大学および企業にとってメリットは大きいと考えます。

今年はさらに数社の「共同研究講座」が出来る予定ですが、今後、より多くの企業が参加して真の産学連携を遂行し、潜在する阪大の知的資源および人材をフルに活用することにより、わが国の国際技術競争力が一層高められるものと期待できます。

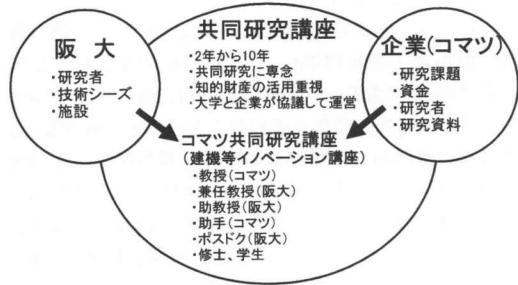


図1. 共同研究講座の枠組み

（竹田太四郎（電気・昭44）記）

## 辻毅一郎教授 最終講義・懇談会

電気電子情報工学専攻電気電子システム工学部門教授・辻 毅一郎先生は、平成19年3月31日をもって定年退職されることになりました。ご退職を迎えるにあたり、最終講義が平成19年2月9日（金）午後3時より銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホールにて行われました。当日は、学内ののみならず卒業生をはじめ、学外からも多数聴講に来られました。専攻長の河崎善一郎教授の先導によりご入場され、部門長の伊瀬敏史教授の司会によりご略歴の紹介の後、最近のご研究内容を中心とした第一部「需要サイドからのエネルギーシステム論」と、学生時代からのご経験を振り返った第二部「システム工学に魅せられて」から成る講義が始まりました。

第一部では、まず住宅におけるエネルギー消費構造の分析として、未来開拓学術研究推進事業及び阪大フロンティア研究機構の研究プロジェクトとして、総計160軒にも及ぶエネルギー消費の実測調査を行い、多様なエネルギー消費の実態を定量的に明らかにした結果について分かりやすくご説明下さいました。次に、実測データ等に基づく都市エネルギーシステムの最適化としては、CO<sub>2</sub>削減や一次エネルギー削減のような評価指標のとり方や、目標とする削減率の設定により様々なエネルギーシステムがパレート最適解として現れることを述べられ、一概にエネルギーシステムの優劣を判断することはできないことを説かれました。さらに、小地域における新しい電力システムの概念として、マイクログリッドやFRIENDSに関する研究にも触れられ、研究成果の一端をご紹介下さいました。第一部の締めくくりとして、今後重要となる研究課題や展望についても触れられました。

続いて第二部では、学生時代からのご経験を振り返

られ、まずは学生時代にシステム工学と出会うきっかけとなった「システムズ・エンジニアリング入門（熊谷三郎編著、昭和37年）」の章立てを紹介され、システム工学の方法論と応用例が総括的に纏められている内容に、当時大変感銘を受けたことを述べられました。このきっかけから、当時著名な研究者が在籍していた米国ケースウエスタンリザーブ大学に留学されたことを述懐されました。さらに、システム思考の実践として、システム工学における「目標、計画、状態、評価、フィードバック」の考え方をエネルギー・システムに適用した場合のほか、大学の国際化にも同様なアプローチで取り組むことを述べられました。最後に、皆様からのこれまでのご支援に対しまして感謝の言葉を述べられ、講義を締めくくられました。

講義の終了後、先生の長年のご指導への感謝の意を込めまして、研究室の折田牧子秘書より花束が贈呈されました。また、現在、先生が室長を務めておられる本学国際企画室ならびに、以前にセンター長を務められた本学留学生センター有志の皆様からも感謝の意を込めた花束贈呈がそれぞれ行われました。その後、受講者全員の大きな拍手の中、ご退席されました。

最終講義終了後、同じく銀杏会館の別室において、先生を囲んでご退職をお祝いする懇談会を開催し、学内外合わせて約100名の皆様に参加頂きました。佐伯修学内講師の司会のもと、河崎善一郎専攻長の挨拶にはじまり、関西電力（株）エネルギー利用技術研究所長 高尾光昭様、（株）明電舎支配人 石川隆章様から祝辞が述べられた後、本学名誉教授 藤井克彦先生からもお祝いのお言葉を頂きました。その後、日本ネットワークサポート（株）取締役 和田道夫様のご発声で乾杯が行われ、歓談に移りました。

懇談会中は、会場のあちこちで辻先生を囲んだ歓談の和が広がり、なごやかに時が過ぎました。懇談会も終わりに近づいた頃、卒業生や学会等から届いたお花や祝電の披露後、門下生を代表して九州工業大学 三谷康範教授がスピーチをされ、卒業生の活躍や、辻研究室を卒業・修了した元留学生からのお祝いメッセージ等を紹介されました。最後に、辻先生から参加者皆様へのお礼の言葉が述べられ、会は盛会のうちに開きとなりました。  
(杉原英治 記)

## 中塚正大教授 最終講義

レーザーエネルギー学研究センター（工学研究科電気電子情報工学専攻）中塚正大先生は、平成19年3月31日をもって定年退職されることとなりました。ご退

職を迎えるにあたり、最終講義が平成19年2月21日（水）午後3時よりレーザーエネルギー学研究センター大ホールにて行われました。当日は学内の先生方や学生のみならず、学外（韓国を含む）からも卒業生、関係企業の方々等多数聴講に来られました。レーザーエネルギー学研究センター長の三間周興教授より中塚先生のご略歴紹介および電気電子情報工学専攻の伊瀬敏史教授からのご祝辞を頂いた後、「ものの見方と歴史」と題する1時間半の講義が始まりました。

先生はまず、研究歴を大阪大学での学生時代、近畿大学での教員時代、大阪大学での教員時代をフランス留学前と後に分けられ、各時代における研究業績について紹介されました。炭酸ガスレーザーの高出力化、レーザー核融合プラスチックターゲットの開発等について概説された後、開発当時世界最大出力の12ビームガラスレーザーシステム「激光XII号」の開発について述べられました。若い人たちとチームを組んで3年間苦楽をともにされた経験から、“リーダーは部下からの批判を受け入れる寛容さが必要で、これができてはじめて相手を批判できる”と強調されました。次に、革新的な高出力レーザー開発には、新レーザー材料の開発が必須であるとの信念から、熱ショックに強い石英へのNdイオンの均一ドープの研究をはじめとする多岐にわたる新レーザー材料研究について紹介がなされました。その中で、ビスマス系のレーザー材料は、超短パルスレーザーや通信分野への応用が期待でき今後大きな発展が予想されると強調されました。また、先生はレーザーの産業界への浸透には、レーザー価格の大幅なコストダウンが必須であることを述べられ、レーザー技術総合研究所および先生が立ち上げられたベンチャー企業であるオプト・エレクトロ・ラボラトリと協力して開発された低価格マイクロチップレーザー等について紹介されました。以上の研究成果は、多くの卒業生および共同研究者の協力により達成されたことに対してお礼の言葉を述べられました。

次に、本題であるものの見方と歴史について熱く語られました。先生も若いころ自分とはなにかあるいは自分の位置について随分と苦悩された経験から、学生には“自分の位置を理解しろ”と教えておられるようです。自分の位置は、統計上有る点にプロットされるわけで、卑近な例を貯金額にとり、当時日本の平均貯金額は700万円であるのに対し、自分の貯金額は大きく平均を下回り驚かれたそうです。物事の分布には正規分布とボアソン分布があり、貯金額はたぶんボアソン分布に従うため、分布のピークは平均額を大きく下回ることを知って安心されたそうです。また、世の

中に横軸の座標は色々あるわけで、自分がトップ2%になれる横軸を見出し、その分野で活躍することが肝要であると説かれました。世の中が判るということは、自然、人間および社会のことを知ることで、大変ではあるがこれらすべてについて人生を通して探し続けるなければならない。そのために、本、インターネットおよび友人を有効に活かすことが重要で、特に友人のネットワークを外部記憶装置のように活用することを考えると説かれました。その後、脳の進化と古代の日本等について興味深いテーマについて詳細に述べられました。最後に先生が、長い経験から会得された結論として、自然については“共生の精神”、人間については“批判（を受け入れる寛容さと自由な）精神”、そして社会については“個々の人間が作り上げるものであり、過去すなわち歴史を知ること”が大事であると先生の熱い思いを込めて語られました。

最終講義の後、先生の永年のご指導に感謝の意を込めた花束の贈呈が行われ、拍手につつまれながらご退席されました。その後、センターの大セミナー室において中塚先生を囲んだ懇親会が開かれ、諸先生、旧知のご友人および卒業生の方々と和やかな雰囲気のなか懇談が続きました。（藤田尚徳（電気・昭49）記）

### 佐々木孝友教授 最終講義

電気電子情報工学専攻教授・佐々木孝友先生は、平成19年3月31日をもって定年退職されることになりました。ご退職を迎えるにあたり、最終講義が平成19年3月14日（水）午後3時より銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホールにて行われました。当日は、学内のみならず、卒業生をはじめ学外からも多数聴講に来られました。電気電子情報工学専攻長の河崎善一郎教授の先導でご入場され、量子電子デバイス工学部門長の尾崎雅則教授の司会により、「新機能性結晶の開発とその産業応用」と題する講義が始まりました。

最終講義は、佐々木先生が山中千代衛教授のご指導のもとに取り組まれたレーザー核融合研究から結晶育成に研究テーマが移り変わった経緯についての紹介で始まりました。レーザー核融合研究において、ガラスレーザー激光XII号の波長変換用として $KH_2PO_4$ 結晶育成研究を実施された過程で、結晶成長の問題点をどのように克服し、世界最大の大型結晶育成に成功されたかを、結晶と生物との類似性を交えながら述べられました。その後、波長変換により紫外レーザー光を最も効率良く発生する非線形光学結晶 $CsLiB_6O_{10}$ （CLBO）を平成7年に発見され、さらに融液攪拌を積極的に利用

した新しい結晶育成方法の開発により、高粘性融液のため高品質化が難しかったCLBO結晶の高レーザー耐力化に成功された経緯から、この高レーザー耐力化CLBO結晶を用いて42WのNd:YAGレーザーの第4高調波（波長：266nm）、10Wの第5高調波（波長：213nm）という世界最高出力の紫外光発生に成功され、次世代のプリント基板等、半導体部品の微細加工（孔径～30μmφ）の製造ラインがCLBO結晶により初めて実現されそうになっていることをお話をされました。また、世界で初めて実用化に成功した全固体真空紫外レーザー光源が、次世代半導体マスク欠陥検査装置用光源や医療バイオ分野で期待され、現在盛んに行われている研究開発の状況について紹介されました。また、有機非線形光学結晶の高品質化技術が、難結晶化タンパク質の高品質結晶化技術に展開し、多くの膜タンパク質や水溶性タンパク質の高品質結晶化に成功していることや、半導体結晶工学としてはNaフラックスを用いた液相エピタキシャル法により、大型高品質GaN結晶の育成に成功されていることなど、研究室の新しい展開に関してお話をながら講義が進みました。

最後に、先生の今後の抱負と、これまでの研究生活にかかわってこられた方々への感謝の言葉を述べられ、最終講義を締めくくられました。講義終了後、先生のご指導に感謝の意を込めた花束贈呈が研究室の白井宏子秘書から行われ、大きな拍手に包まれ、先生はご退席されました。講義終了後、別室にて、佐々木先生を囲んだ懇親会が開かれ、約2時間にわたって和やかな雰囲気での歓談が行われました。

（森勇介（電気・平元）記）

### 鷹岡昭夫教授 最終講義

超高压電子顕微鏡センター教授・鷹岡昭夫先生は、平成19年3月31日をもって定年退職されることになりました。ご退職を迎えるにあたり、「電子ビームと過ごした40年」と題した最終講義が平成19年3月16日（金）午後1時半より銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホールにて行われました。当日は、学内のみならず、卒業生をはじめ学外からも多数聴講に来られました。司会は、超高压電子顕微鏡センター・センター長の森博太郎教授がつとめられました。

最初に先生が裏克己教授ご指導のもと発表された昭和42年度の電子通信学会全国大会のアブストラクト原稿の紹介をされ、それが先生の研究の歴史の始まりであったということです。当時、東野田で徹夜で超伝導共振器のQ値の測定をされていたことを懐かしく語ら

っていました。ちょうど超伝導線形加速器（ライナック）による電子加速とマイクロ波励振法の研究を行っていたころ現在の超高压電子顕微鏡の1号機が完成いたしました。しかし、その当時は今と違って、加速管が不安定で、装置はすぐに故障し安定した稼働ができていませんでした。先生の加速器研究のご経験から、超高压電子顕微鏡の加速管を安定に動作させるという非常に地道な役目が回ってきたとのことでした。その研究の結果、加速管の種々の特性の計測や計算により電極設計を見直し、放電を押さえた世界一安定な超高压電子顕微鏡の加速管を実現したことを紹介されました。

その後、新しい超高压電子顕微鏡を開発・製造するために1986年頃からおよそ10年の歳月をかけ、世界最高加速電圧、信頼性・寿命、使いやすさという高い目標を掲げてメーカーである日立製作所と毎月毎月議論を重ね、非常に多くの要素技術の開発をされた経緯をお話しされました。1995年に新しい300万ボルトの超高压電子顕微鏡が完成した後は、超高压電子顕微鏡が非常に厚い試料を鮮明に観察できる能力を活かすため、電子線トモグラフィーの研究を開始されました。当時は使えるソフトウェアもなく、ゼロからのソフト開発ということでしたが、実際にはそれは実用にならず、

現在は数年前に海外の大学で開発されたソフトウェアを使っているとのことでした。10年来の研究の成果により、数ミクロンにも及ぶ細胞の内部構造の3次元観察ができるようになり、また、多層構造をもつ最新のシリコンデバイスの3次元的な解析が可能となり、超高压電子顕微鏡による立体構造解析の新たな分野を開拓されたことを紹介されました。最近では、300kVの高性能電子顕微鏡をベースに3次元観察を自動化するシステムを開発していることを述べられました。

最後に、大学の研究には『時流に乗った研究』と『時流に流されない研究』の2つがあり、どちらも大切であり、先生は後者の方の道を進んできたことを述べられました。また、これまでの研究生活にかかわってこられた方々への感謝の言葉により最終講義を締めくくられました。

講義終了後、先生のご指導に感謝の意を込めた花束が超高压電子顕微鏡センターの尾崎秘書から手渡され、最終講義としては異例でしたが、電子顕微鏡のプロフェッショナルは写真のプロフェッショナルでもあるとのことで、センター職員の方により参加者全員の記念撮影が行われました。その後、別室にて鷹岡先生を囲んだ懇親会が開かれ、約1時間にわたって和やかな雰囲気での歓談が行われました。(西竜治(電子・平2)記)

### 事務局からのお願い

濬電会事務局へのお問い合わせ事項で目立ちますのは、「終身会員であるのに会費の請求をしてきた」ということです。これは、大阪大学工業会と濬電会とを混同しておられるためと思われますので、工業会と濬電会との関係について簡単にご説明いたします。

大阪大学工学部（その前身校を含む）には、学部全体の同窓会「大阪大学工業会」と学科または系の同窓会（例えば電気系学科であれば「濬電会」）があります。従って、濬電会の会員のうちほとんど全ての方は同時に大阪大学工業会の会員なのです。すなわち、会員構成の面では濬電会は工業会の下部組織といえます。

ところが、工業会と濬電会とは財政的には全く独立しております、それぞれが独自に会費制度を設けております。従いまして、工業会会費を既にお支払いになった方、あるいは工業会の終身会員の方からも、濬電会会費（年会費一律4,000円）を頂戴しております。また、濬電会では終身会員制は設けず、毎年会費をお納めいただいております。

会報や名簿の発行などを含め、濬電会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。濬電会の健全財政のため、今後とも会費納入につきましてよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

なお、勤務先、住所の変更などに関しましては工業会とは別途に、濬電会にもお知らせくださいますよう切にお願い申し上げます。

## 新研究室紹介

情報科学研究科  
情報システム工学専攻  
集積システム診断学講座



教授 中前 幸治  
(電子・昭52・M54・D57)

本講座は、平成元年に創設された情報システム工学科の第3番目の講座、集積システム工学講座として、情報システムの高集積化実現に関する教育と研究を行うことを目的に平成2年度に設置されたのが始まりである。その後、平成8年度の大学院重点化に伴い工学研究科情報システム工学専攻情報システム工学基礎論講座集積システム工学領域と改められた後、平成14年4月に、それまで工学研究科、基礎工学研究科、理学研究科に分散していた情報科学技術に関連する教育研究組織を改組・再編して創設された大学院情報科学研究科の7専攻の内の一つの情報システム工学専攻集積システム診断学講座として改組され現在に至っている。平成17年3月まで藤岡 弘教授が担当され、平成18年1月から中前幸治が担当している。現在の構成員は、中前のほか、三浦克介助教授、御堂義博特任研究員、大矢佳恵事務補佐員である。

高度情報化社会は、高度に集積化されたハードウェア、ソフトウェア、および人によるシステムによって支えられている。ハードウェアは集積回路（IC）と呼ばれた時代から大規模集積回路（LSI）、さらには超大規模集積回路（VLSI）と発展して来ており、集積度の増加とともに機能も飛躍的に高度化して来ている。その一方、集積度が増加し、機能が複雑化するにつれて、VLSIの診断は飛躍的に困難になってきている。また、社会機構のますますの複雑化による心理的なストレス因子などにより、人に対しても多様な病態が出現してきており、高度なシステム

診断法が求められている。さらに、システム全体に対する効率、コスト等の最適運用技術が求められている。

本講座では、VLSI設計技術、VLSIテスティング技術、画像処理等の高度情報処理技術、シミュレーション・最適化技術等のシステム技術を基礎として、人をも含む集積システムの診断、診断容易化技術、評価、および運用に関する教育と研究を行っている。

進行中の主な研究テーマは次の通りである。

(1) ナノメートル世代VLSIシステムの診断・診断容易化技術・評価に関する研究

VLSIの高密度化・複雑化に伴い、その信頼性及び品質に対する要求が急激に高まっている。本研究では、EB・FIB統合化VLSIテストシステムや、最先端の走査レーザSQUID（超伝導量子干渉素子：超微小な磁束の変化を検出することができる素子）顕微鏡法およびレーザテラヘルツエミッショニ顕微鏡（フェムト秒レーザを用いてLSIからのテラヘルツ（THz）波の放射・検出を行う）法を用いた、VLSI内の電気的欠陥や信号伝達経路を診断する技術の開発等を行っている。

(2) 超低SN比画像におけるパターン認識のための統計的・知的画像処理に関する研究

VLSIの高密度化・複雑化に伴い、VLSI製造段階でのナノオーダーの超微細な構造パターンを認識し、計測する困難性が飛躍的に高まっている。本研究では、このような超微細構造計測に用いられている走査型電子顕微鏡観測低SN比画像を主たる対象とした、統計的画像処理法、画像劣化要因推定と超高解像化法の開発等を行っている。

(3) ナノメートル世代VLSI生産システムのロバスト性・経済性の評価と戦略に関する研究

人への利便性のためにVLSIに要求される機能は多種多様になり、VLSI生産は少量多品種となっている。また、VLSIのライフサイクルの短縮化により、利益を決定する様々な要因のより精密な検討が必要不可欠となってきている。本研究では、離散事象シミュレーション技法、ニューラルネットワーク、スケジューリング理論、タグチ法等を用いて、VLSI生産システムの効率的、ロバストな、経済性の高い運用方法に関する研究を行っている。

(4) システム臨床医工学に関する研究領域

めまい疾患の診断精度を高めるためには、内耳部分障害の評価法の開発が急務である。このための平衡機能神経系シミュレータの開発とそれを用いた評価・診断・治療支援システムの開発を行っている。また、高度画像情報処理技術とコンピュータグラフィック3次元形状再構成技術を融合させた集団検診用胃X線画像のコンピュータ支援病変検出システムの開発も行っている。

当研究室は、産業界との共同研究の実施など、外部機関との積極的な連携を通じて、研究領域の一層の充実を図り、集積システムの診断分野の世界の中の1つの拠点となるべく、「より善く生きること」をモットーに、「四つのイドラー（偶像）」を退け「三つの表」に基づいて日夜研究に励んでいる。

**電気電子情報工学専攻  
電気電子システム工学部門  
先進電磁エネルギー工学講座  
プラズマ生成制御工学領域**



教授 上田 良夫

本研究室の源は、吹田キャンパス以前の枚方キャンパスの時代に遡る。1956年に工学部岡田實教授と理学部伏見康治教授の共同研究として、我が国における最初の核融合実験が行われ、多量の中性子を観測するという成果を得た。この研究の継続発展のために、工学部共通講座として1960年に超高温工学講座が設置され、伊藤博教授が就任し、1976年に渡辺健二教授に引き継がれ、1990年からは西川雅弘教授が担当した。そして、2006年7月より、上田が本研究室を担当し現在に至っている。1979年には、大学院専任専攻である電磁エネルギー工学専攻設置に伴い、その基幹講座となった。1996年には工学系大学院改組に伴い、電子情報エネルギー工学専攻（電磁エネルギー工学コース）担当となり、2005年の再度の工学系大学院改組により、電気電子情報工学専攻の先進電磁エネルギー工学コース所属となった。この時、研究室の名称も超高温工学講座から、プラズマ生成制御工学領域と改めた。現在の研究室の人員構成は、教授 上田良夫、学内講師 大塚裕介、博士後期課程2名、博士前期課程9名、および学部生1名である。

本研究室は枚方キャンパスにおける日本初の核融合実験から一貫して、核融合エネルギー研究を研究の柱としている。核融合エネルギー実用化のためには、数億度の超高温プラズマを十分な核融合反応が起きるまで、容器内に閉じこめる必要がある。本研究室は磁場によってこの超高温プラズマを閉じこめる方式の核融合研究を長年続けてきており、西川教授の時代からは、核融合炉システムの設計や、高温プラズマとそれを閉じこめる容器壁の相互作用の研究を進め、上田もその路線を受け継ぎさらなる発展を目指している。

核融合研究は、今大きな節目を迎えており、日本、欧州、米国、ロシア、中国、韓国、インドが協力して、新たな磁場閉じこめトカマク型核融合実験装置「ITER（イーター）」をフランスに建設し、エネルギー増倍率10以上の核融合プラズマを実現する試みが始まった。それと並行して、日本と欧州が協力して「幅広いアプローチ」と呼ばれるITERを補完する研究開発も始まっている。「幅広いアプローチ」では、ITERよりコンパクトなトカマク型磁場閉じこめ装置の可能性を探求する装置や、長期間の運転に耐える炉材料研究用の中性子発生装置を利用して、ITERの次の核融合原型炉に必要な技術の研究開発を進める。本研究室においても、「幅広いアプローチ」に積極的に参加するとともに、ITERや原型炉に対して貢献することを念頭に置いて、研究活動を進めている。

現在の研究室では、高粒子束複合イオンビーム装置、プラズマ照射装置、高強度レーザー装置などを利用して、高い熱負荷・粒子負荷を受けた際の核融合炉壁材料表面における複雑現象の解明を行っている。また、エネルギーシステム全般を視野に入れた装置の保守・保全に関する非破壊検査などの研究も行っている。さらに、日本原子力開発機構、ドイツユーリッヒ研究所、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校、等との国内・国際共同研究にも積極的に参画し、幅広い視野から研究を進めている。これらの核融合エネルギー研究に加えて、核融合炉における特異なプラズマと壁の相互作用現象から学んだ知識を生かし、新たなプラズマ応用分野の開拓も積極的に進めていくと考えている。

# 退官された先生方の近況

中井 貞雄（電気・昭36・M38・D41・大阪大学名誉教授）

## 激動の時代における教育

今を去るほど半世紀前、昭和36年の電気工学科卒業の謝恩会において、恩師から戴いた言葉が「会社へ入ってまずやること、三年の食いぶちをためよ」でした。終身雇用が一般的で、リストラなどという非人間的な言葉がなかった時代においてなお、事にいどんて己の信念をとうし、節を曲げない生き方が出来る基盤をつくれと励まされました。

国立大学が国立の大学法人となり、大学の様子がずい分と変わったように見受けられます。企業のありようも大きく変わりました。我々がなじんできた年功序列や終身雇用制がバブル崩壊後とも簡単に変化しました。単に雇用形態だけでなく、社会そのものの構造改革が叫ばれ、戦後60年の制度疲労がけん伝され、グローバル化だの文明の崩壊や衝突だのがセンセーショナルに議論され、国のかじ取りのむつかしさを示しているようです。このような激動の社会へ出てゆく学生に、科学技術の基礎とともに精神の心棒をどのように確立させればいいのでしょうか。困難ではあっても激動の時代にこそ教育が我が国の未来にとり最重要的事業です。

このような波乱万丈の時代に入る直前、2001年3月に阪大を退官し、国立高知工業高等専門学校（通称高知高専、徳島の阿南高専には西村先生がおられました）に赴任しました。それまでの18才から62才までという多感な青春も、働き盛りも、人生の大部分を阪大で過ごしました。それも電気工学科、電磁エネルギー工学専攻、レーザー核融合研究センターという教育、研究、社会的貢献、国際的貢献において我が国有数の優れた環境の中で過ごすことが出来たことは本当に幸せだったと感謝の気持ちでいます。しかも大学が純粹に人類と文明の未来のため、我が国の発展のために教育と研究に専念できた時代でした。

2001～2005年の高知での4年間は豊かな自然に恵まれ、酒をこよなく愛する豪快な土地がらの高知のへき地に生活することにより、我が国の進むべき方向、これから國づくりについてある種の示唆が得られたように思います。それは健全で自立した文化的な地方の構築と地域の若者に対する高度な教育の重要性です。中央から離れた地域には経済一辺倒な視点からの脱却が必要と思われます。

2005年4月からは浜松に新しく出来た「光産業創成大学院大学」で仕事をしています。19世紀は蒸気の時代、20世紀は我らが電気の時代、そして、その技術の発展延長のうえに21世紀は光の時代と言われています。いま光は医療・健康、バイオ、加工・プロセスから情報・通信にいたる広範な産業分野で、それぞれの分野での基盤技術になろうとしています。20世紀初頭に電力事業や電気を利用した多くの企業、通信事業が勃興しました。21世紀初頭のいま、いよいよ光技術が新しい産業分野を開きつつあるようです。特にエネルギー分野に関しては20世紀半ばに出現した「核」エネルギーと「レーザー」が組合わさったレーザー核融合が、いよいよ基礎研究の段階からエネルギー開発計画へと発展すべきときになりました。石油99%以上を輸入している我が国を、このくびきから脱却し、世界に冠たる日本にしたいものと夢みてやっております。

滝電会でのゴルフ初デビューは1991年、53才のときでした。いまはなき山口次郎先生と同じ組で回らせて頂き、先生の温容と的確な御指導で、上がってみれば自分でもびっくりの89。ハンデ30で出ていたのでネット59でした。藤井先生には年は少々くっているが大型新人出現と期待されたのですが、その後なかなか上達しません。それでも頑張って楽しくやっています。

滝電会は、電気工学科から、通信、電子、情報工学科、電磁エネルギー工学専攻と、時代とともにその先端を切り開き新しい産業技術を生み、社会に貢献してきました。激動の時代の今こそ社会の第一線で活躍しておられるOBの皆様の力と識見を学究の途上にある学部、大学院学生の教育に活用されるべきではないかと思っています。最後に会員皆様のますますの御活躍と御健勝を祈念して筆を置きます。

## 赤澤 堅造（電気・昭40・M42・D49・大阪大学名誉教授）

永年大阪大学でお世話になり、おかげさまで昨年3月に定年退職した赤澤です。少し古い話になりますが、昨年2006年お正月明けの電気系の新年交礼会に、それ以前のルールからすると、情報システム工学科の最年長者である私が挨拶することになりそうであったので、準備していたものがあります。その一部をここで記載させていただき、近況報告の一部といたします。最終講義でも一部紹介しました。昨年のお正月であるので、大分ピントがはずれますが、ご容赦を。

「新しい年の初め、と言っても、暦の上のことで、周りの景色もきのうとは変わらないのですが、気分を新たにして、1年の計を、そして将来を考える、そのような気分になるのもお正月でしょう。日本はいまや、世界一の長寿国、経済大国2位で、生活もずいぶんと豊かになっていますが、良いことばかりではなく、暗いニュースも結構あり、日本の人口はついに減少に転じました。これから日本をどのような国にしていくのか、私たちの子孫にどのような社会と文化を残していくのか、それを真剣に考えなければならない時に来ています。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）をご存知と思いますが、教育者、ジャーナリスト、作家として知られています。彼は松江から熊本に移り、第5高等中学校（現熊本大学）で先生をしており、1894年（明治27年）に職員と生徒を前に、「極東の将来」と題して講演を行っておりまして、このときの結びの言葉が熊本大学内の英文碑に刻まれていました。邦訳は次のようになっています。「日本の将来は、無益な贅沢、華美を捨て、質実、簡素、善良を愛する九州魂、熊本魂の維持如何にかかる」とあります。「100年のときを超えて、現代人にも通じるメッセージと言えそうです。

それから、約50年後に、大正末期から昭和初期の駐日フランス大使、詩人：ポール・クロードルは、日本を、「非常に古い文明をもちながら、それを見事に近代文明に適応させた国」と賞賛し、「日本人は貧しい。しかし、高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残ってほしい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」と述べていることが、お正月の新聞に載っていました。

次は最近のこと、昨年の中国からの報告で、専門家集団が中国の近代化の歩みを分析したものです。その中国科学院からの「中国現代化報告2005」によると、中国は今世紀中ごろには経済先進40ヶ国の仲間入りをし、後半には世界最先進国の仲間入りをする。そして大事なのは、この次です。2001年時点で中国は米国と約100年の差があり、ドイツとは約80年、日本とは約50年の差がある、といっている。さて、日本を中心にしてこのデータをみると、日本は中国の50年先を行っていることになります。それも気になるが、日本は米国と50年の差があり、ドイツと30年の差があることになる。本当かなという疑問がありますが、私たちの生活実感でも、正直なところ米国やドイツにはるかに及ばないものを感じる。日本における教育の投資は世界の先進国の中で最低です。高等教育、大学についての投資は、各国が対GDP 1パーセントを当てているが、日本は0.5%である。

中国は日米欧に追いつこうと懸命に研究する。日本人はすっかり米欧と同等の先進国になった気でいる。中国のように「追いつき追い越せ」、などと言わなくなってしまった。本当にそうななのか、どうもそうではなく、中国の報告書からは、先進国ドイツより30年も遅れていることになる。35年前、1970年の万博が大阪、吹田で開催されましたが、テーマは「進歩と調和」でした。眞の先進国となるために、経済だけでなく、学術、文化、芸術、観光なども先進でありたいものです。」

2006年3月に定年退職しましたが、遣り残した仕事があって、すこし研究を続けて、区切りをつけたいと考え、現在大阪工業大学工学部で教育と研究に従事しております。本学の先生方には井上工学部長を始め、濬電会員が多く居られ、活躍をされています。さて小職は、工学と生物学・医学の融合領域である生体工学、医工学の分野の研究に従事してきましたが、縁あって2006年4月に発足した生体医工学科の準備にも関わり、また現在学科長を務めております。ロボティクスとバイオメディカル工学の技術者を養成する学科で、現在は学部1年生のみ122名です。2007年4月からは大学院が発足します。専任教員は現在8名ですが、完成年度には13名となります。超多忙であります、お蔭さまで元気に毎日を送っております。本年が皆様にとって良い年でありますことを願って、近況報告とさせていただきます。

## 卒業生の近況

谷坂 彰彦（電気・昭62・M元）

大学在学中から、プラント関係の仕事につければと考えていましたが、修士卒業の平成元年、富士電機に入社することになりました。希望でもあった大手製鉄会社の板加工ミルライン・棒鋼ラインという製鉄プラントのシステム制御設計に携わることができました。この間、設備の制御に必要な数値制御や、シーケンス制御などを勉強し、電動機駆動用インバータを含む駆動システム設計やロジックプログラムを作成するなど、プラントを立ち上げる実務に従事しました。入社して初めてスキンパスミルラインの駆動制御を担当したときには、シーケンスプログラム設計の考え方方に不具合があり、数週間も現地の電気室に缶詰という苦い経験もし、実務の難しさ、制御設計の緻密さを実感した次第です。

富士電機在籍4年余りの後、父の経営する株谷坂鉄工所に身を移しました。尼崎に本社をおくこの会社は、従業員六十名ほどの中小企業ですが、ここでは主に鉄線を加工する産業機械を設計・製作しています。製鉄会社がつくるワイヤー原線は用途によって、細く引き伸ばし、必要な太さの鉄線に仕上げます。そのワイヤーを引き伸ばす機械を伸線機（写真）といいますが、当社ではその伸線機を作っています。またその鉄線は、例えば釘やねじなどに加工されますが、釘をつくる製釘機や、ねじの形状を作るヘッダーおよびねじ山を作るローリングマシン（写真）という機械も当社で製作しております。他にもワイヤーを成形する機械を多種多様に設計製作しており、国内はもとより海外への輸出を行っております。私も去年は有刺鉄線をつくる機械（鬼針機）の技術立会いで、遠くメキシコまで訪問することができましたが、このように海外に出ることもしばしばあります。

当社のような中小企業は、従業員一人ひとりがお客様を間近に感じ、緊張感もありますが、それだけに客先の要望を即実践できる、小回りのきく集団であると思っています。産業機械開発に興味のある方、また推薦者がいらっしゃれば、是非TANISAKAにお声かけの程よろしくお願ひします。

最近、世の中が大きく変化する中、凶悪な犯罪や学校教育問題、政治がらみの汚職事件や国際的テロなどゆゆしき問題が多く発生していますが、これらは行き着くところ、人間の私利私欲・自己中心的醜態のあらわれだなど感じています。大学を卒業して20年たった今、それを自省し、企業人としても一個人としても、他が為に役立つひとつになるよう努力しなければならないと思うこの頃です。

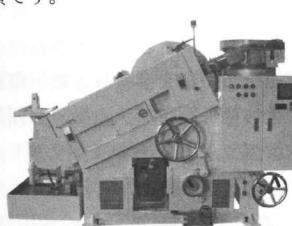
（株谷坂鉄工所）



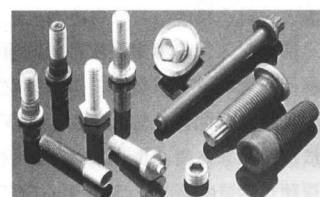
伸線機の概観その1



伸線機の概観その2



ローリングマシンの概観



ねじの製品

濱田 陽一（電子・平6・M8）

私は、平成8年3月に当時の尾浦研究室から電子工学研究科を卒業し、関西電力に入社しました。それから早10年が経過しました。大学、大学院時代の6年間は、非常に長く感じられましたが、この10年は本当にあつという間に過ぎた気がします。ちょうどこの10年間は、電力業界が電力自由化に象徴される大きな変革期にありましたので、

そのダイナミズムの中で関西電力の一員として、私も業務に奔走して来たように思います。私は、技術部門の中でも、直接お客様と接する配電部門を希望しました。そして、その希望通り配属され、架空配電線を地中化する業務や、工事予算の計画を策定する業務などを経て、現在は、配電用の資機材や、工法の開発業務を主に携わっています。

大学院1年の冬、私の人生を決定付ける出来事がありました。平成7年1月17日に発生した阪神淡路大震災です。明け方、自宅マンションで寝ていると、いきなりドーンと突き上げを喰らって目を覚ますと、続けて大きな横揺れが来ました。それは、まるで神輿で担がれているような感じで、自分が寝惚けているのだと勘違いし、私はもう一度ベッドに潜り込んで寝直してしまいました。程なく父親の「大丈夫か。」という声で夢では無いことを悟りましたが、それほど現実とは思えない揺れでした。幸いにも家族とも軽症で済みましたが、この後数ヶ月間は、車の中で寝泊りするなど、非常に不自由な生活を強いられました。その体験の中で、ライフラインというものが如何に重要であるかを痛感したこと、また、それを支える人たちが使命感に燃えて懸命に働く姿を目の当たりにしたことが、今の仕事を選んだ大きな動機です。ですので、会社の先輩方が話される震災復旧時の奮闘ぶりを、私はいつも嬉々として聞き入っています。

プライベートでは、最近、家族でホームステイを受け入れるホストになるなど、海外の人達との交流を楽しんでいます。1年前には、以前に受け入れたフィリピン人のJojoさんの家に1週間、妻と娘の家族3人で逆にホームステイに行きました。勿論、フィリピンの田舎町でのホームステイは、貴重な体験で、家族の大切な思い出となっています。そのホームステイ中に日本では滅多に起こらないことを経験しました。停電です。しかも夜だったため、室内が急に真っ暗になりました。数十分後、パッと照明が再び灯り、全員でホッとして顔を眺め合いました。この時、阪神大震災発生の1週間後、マンションの明かりが初めて灯ったときの住民の大きな歓声と歓び合う顔が、フラッシュバックしました。それと同時に、記憶の奥底で忘れていた感覚が、瞬時に思い起こされました。

私が、マンションの明かりが灯ったときに感じたもの、それは安心と希望でした。電気の点いた明るい家に戻れるという安心と、元の暮らしに戻れるかもしれないという希望をその明かりに感じ取ったのです。私は、人に安心する気持ちや、少し大袈裟ではありますが、明日への希望をも与えることのできるこの仕事に誇りを持って、初心を忘れず、これからも情熱を注ぎ続けたいと思っています。

(関西電力株)

## 東 吾紀男（情シス・平7・M9）

情報システム工学専攻の藤岡研究室（当時）を卒業し、松下電器産業に入社して約10年が経ちました。その間、本社研究所で一貫してコンテンツの著作権保護システムの研究開発に従事しています。

入社3年間は、地上/BS/CSデジタル放送で用いられている「B-CAS」とよばれるコンテンツ保護システムの開発に従事しました。B-CASは、暗号技術を用いて放送番組を保護（スクランブル）し、視聴者の契約に応じて番組の視聴可否を制御するシステムです。本開発では、放送局の送出制御システムから、受信側で視聴可否制御を行うB-CASカード（デジタルテレビに挿入される赤色のICカード）までに至る、システム全体の開発に携わりました。研究所と事業部門とが一体となってシステム開発を行いましたので、研究所に所属しながらも、事業・モノづくりの厳しさと楽しさとを身をもって体験することができました。

2000年頃からは、デジタルテレビ向けにインターネット経由で映像配信を行うためのデジタル権利管理システムの方式開発・業界標準化活動に従事し、現在に至っています。本開発はなかなか実用化への道筋が見えず、特にここ数年は苦しい状況でした。しかし、最近ようやく実用化に目処が立ち、現在は業界標準化活動を中心に奮闘する毎日です。デジタルテレビをはじめとした民生機器の利点である「簡単な操作ですぐに利用できる」といった特性を最大限に生かし、ユーザがインターネットを通じて、多様なコンテンツ・サービスを気軽に楽しめる世界を実現

していきたいと考えています。

ところで、卒業後の母校に関するニュースは、年1回発行の「滝電会会報」から得るのみでした。しかし、最近は大学も積極的に外部へのアピールに取り組んでいるため、広報誌・ラジオ・書籍などからタイムリーに様子を知ることができますようになりました。私は通勤途上の駅で配布されている広報誌からニュースを得るようにしています。広報誌では、大学法人化などに伴って様々な変革が進められている様子や、各分野において優れた研究成果を創出し続けている様子などが伺えます。母校の変革・活躍を目にするたびに、私も立ち止まることなく成長し続けなければ、と気持ちを新たにしています。

(松下電器産業株)

### 西村 健治 (通信・平9・M11)

NTTドコモに入社してからもう8年が経ってしまいました。今回この記事を書かせて頂く事で、ふと今までの会社生活を振り返る良い機会を頂きました。この8年間では何度か異動があり、研究と開発の分野の中ではありますが様々なタイプの検討・業務に携わらせて頂く事が出来ました。その中で何度か達成感や悩みを経験しつつ、胸を張って自慢できるような業績は残念ながら余りありませんが、今まで築き上げた人的ネットワークは私の大切な財産です。

入社以来感じている事ですが、人とのつながりは本当に重要で貴重なものだと思います。日常生活でも当然ですが、会社では特に効果を発揮するのではないかと思う。今まで困難な調整ごとや体力的にもハードな業務に携わった時にも、周囲の理解ある上司・同僚・後輩の支えのお陰で乗り切った例は1つや2つではありません。逆に、仮に自分に非常に適している業務であっても、周囲の人に恵まれなければ、会社での生活は余り充実しないのではないかと考えています。現時点では、仕事は日常の時間のうちの多くを費やすものですから、良い人脈は非常に大事であると思いますし感じています。

話が少し飛びましたが、私が現在の人的ネットワークを成し得た大きな一因として、大学のOB・OG会の存在があります。私は入社2年目から、関東ドコモグループの阪大OB・OG会の幹事をさせて頂く幸運に恵まれました。当初は社内のOB・OGの方を探すところからという状況でしたが、皆様のご協力のお陰で、今や名簿には(関西も含めて)170を超える方のお名前が記載されています。幹事の仕事というのは地味なもので、名簿のメンテナンスや懇親会の設定・案内・運営が中心ですが、その分、より多くのOB・OGの方々と接する事が出来ました。そのお陰で、普段ではほとんどお目にかかるチャンスすら無いような皆様と交流させて頂く事もでき、仕事や日常における自分の視野を広げる事等にも非常に有益です。大変有り難い役割を担わせて頂いていると感謝しております。

人との良いつながりを形成する上で他に重要な点は、謙虚な姿勢だと思います。まず自分が謙虚でなければ、相手は心を開いてくれません。今まで、幸運にも何人かの尊敬に値する上司にめぐり合った事がありますが、間違いない謙虚な方でした。私も横柄・傲慢にならぬよう、またOB・OG会を更に大切にして、これからも精進して行きたいと思います。

(株)NTTドコモ)

### 中尾 太郎 (情シス・平11・M13・D16)

思い返せば早いもので、NTTデータに入社するべく東京に引っ越ししてから、もう3年が過ぎようとしています。電気系E-6棟から情報科学研究科棟への慌しい引越しが大阪大学での最後の作業でした。

この3年間は、NTTデータの技術開発本部で、コンテクストアウェアネスやイベント駆動型アーキテクチャといっ

た、新しい技術トピックを活用した情報システムで、お客様に新しい価値を創造・提供できるようにすることにも取り組んでいます。技術開発本部というところは、直接お客様にシステムを開発して提供するというよりは、バックヤードで技術の弾込めをしている部署なのですが、それでも限られた期間や費用、資源の中でプロジェクトを適切に運営するプロジェクトマネジメントをはじめ、ビジネスボリュームやステークホルダの存在を常に念頭に置くことを求められる仕事のスタイルなど、全社的に共有されているカルチャーの下で、大学では学べなかつたことを得る毎日です。

また、NTTデータが扱うシステムには、決済ネットワークなど、まさに社会のインフラと呼ぶべき大規模なものも多く（ほとんどは恥ずかしながら入社してから知りましたが）、これらの仕組みを知り、情報技術の社会におけるAsIs像とToBe像を考察することも個人的に楽しんでいます。

さて、最近のシステム開発業界では、プログラムコーディングや試験などのうち、コモディティ化しつつある特定のプロセスを国外にアウトソースするオフショアリングの動きが盛んになってきています。ドマスティック感の強かったこの業界にも、グローバル化の動きが出てきています。オフィスビルでインドや中国の人と顔を合わせることも多いです。昨年には、中国人と一緒に短期の開発に取り組む機会もありました。そのときに、彼らのITスキルだけでなく、コミュニケーションスキルをはじめとする全人的な優秀さに舌を巻きました。そんな人たちがゴロゴロいるのです。

両国合わせて世界人口の4割という膨大なバックグラウンドから、今後も続々と飛び出してくる彼らのような技術エリートと伍していくためにも、これまで以上に、自分自身の市場価値を高めることを意識しなければと思っています。アンテナを高くしたり、経験を積んだりして、知識を集積することはもちろんですが、それを価値に変える知見を武器として使えるように磨き上げなければ感じています。

こういう状況でものをいうのは「ものの考え方」だと思います。「ものの考え方」を左右するものは、というと、自分に関係する人間が真っ先に思い浮かびます。特に、大学生活を通して知り合った人の考え方方が今の私に与えている影響の大きさを改めて振り返ってみると、幸運な大学生活を送れたことへの感謝の念を禁じえません。今後ますますヒートアップすると思われる人間力の競争において、私が学んだ大学環境が、後続の人たちにも引き続き大きな力を与え続けることを祈念しています。  
(株NTTデータ)

## 衣笠 友壽（電子・平12・M14）

私は卒業後5年間、キヤノン製デジタルカメラに搭載されている内製半導体デバイスの設計業務に携わっています。キヤノンの半導体デバイスとは、デジタルカメラに必要な、撮像、測光、測距といった機能を実現するために、シリコンフォトダイオードとCMOS集積回路を組み合わせた多機能ICです。大学で学んだ、半導体物性、電子回路の知識を活用して、写真好きという趣味を満足できる、恵まれた環境で仕事に取り組んでいます。

光センサICの設計業務は、設計データを作れば終わりではありません。仕様検討から量産立ち上げまで、新規デバイスをトータルプロデュースすることが求められます。そのためには、プロセス開発、生産技術、品質保証など、複数の部門と協力して、チームで仕事を進めなければいけません。

各部門の担当者は百戦錬磨の先輩ばかりで、最初は「おまえさんに設計ができるの？」という態度を感じていました。そこで、わからないことはとにかく聞く、どうすれば相手が自分の考えを理解して動いてくれるか考える、など、自分を認めてもらうためにもがき苦しんでいました。

3年経って、自分が設計担当した新規デバイスが量産フェーズに移行したときの喜びは格別のものがありました。その頃から、一緒に仕事をしている他部門の先輩が「こういう問題があるんだけど、設計の立場から衣笠はどう思う？」と聞いてくれるようになりました。こうして、他の人が自分の成果を認めてくれていると感じることで、自

分の仕事に自信持てるようになりました。

最近のトピックとして、昨年3月に長男が誕生しました。「子育ては辛いよ」と周りから聞かされて、ある程度、覚悟をしていたのですが、聞くのとやるとでは大違い。予想していた以上に大変です。妻に協力して、夜中まで子どもの夜泣きをあやしたり、子どもを背負いながら皿洗いを手伝ったり、自分の時間をほとんど取ることができない時があります。

しかし、育児に協力することで、様々なことを学ぶことができました。例えば、育児関連の書籍から、「子どもを一方的に叱りつけるのではなく、子どもの話を聞いて気持ちを理解することが大事」ということを学びました。ここで、“子ども”を“部下”あるいは“後輩”に置き換えると、コーチングの技法へ応用できることがわかります。

子育てを負担と考えるのではなく、子育てで学んだことを仕事で応用する。また仕事場で揉まれることで自分を成長させ、その経験を子どもに伝える。そうした良いフィードバックを心がけて、実践したいと考えています。

(キヤノン株)

#### 税所 真前（電気・平13・M15）

九州電力へ入社し、早いもので4年が経過しようとしています。この原稿の執筆依頼を頂き、入社から現在までを改めて振り返ってみると、その早さに驚くばかりです。この期間に2回の転勤も経験し、福岡・鹿児島・宮崎と九州各地を転々としながら、様々な業務を経験させてもらいましたので、その一端を紹介させていただきます。

私は、入社以来、発電部門と呼ばれる分野に属しています。この部門では、主に変電所や水力発電所、さらには電力系統の運用に関わる業務等を行っています。入社から約2年間は、最も現場に近い部署に所属し、変電所や水力発電所に設置されている機器の定期点検や修繕工事を担当していました。作業は請負会社に依頼することもあるのですが、自分たちで作業することも多く、毎日のように現場に出向き、汗まみれ・油まみれになりながら点検・修繕を行いました。現場にはクレーン付のトラックを運転して行き、小型移動式クレーンの免許を取ってクレーンを操作し……と、やせ型体型で運動音痴な私には大変な仕事でしたが、非常にやりがいのある仕事でした。というのも、今まで本の中しか見たことのない様々な電力機器に実際に触ることができ、内部の細かい部分まで実際に見ることができるからです。何か障害が発生すれば、現場へ急行し、障害のあった部位を自分で確認することができます。現場には、机上では学ぶことのできないものがたくさんあります。この現場での経験は、現在の業務を進めていく上でも非常に役立っています。

現在は、昨年8月から電力系統の保護装置関係の業務を担当しています。電力系統では、雷撃等により様々な事故が発生しますが、それらを検出し、事故区間を瞬時に切り離して系統を守るのが保護装置の主な役割です。事故を検出する必要があるわけですから、あらかじめ想定される事故電流等を計算し、その値を設定する必要があります。この値が正しくないと、事故区間を切り離すことができず、大事故に発展する可能性があります。時には、社会的な問題になったり、人身に関わる事故になることも考えられます。そのため、細心の注意が必要な業務ですが、自分が電力系統を守っているという意味で非常にやりがいもあります。ちょっと大袈裟かもしれませんが……。

昨年、東京で貨物船が送電線に接触するという事故が発生したことは、記憶に新しいかと思います。送電線が1箇所切れただけで、あれだけ広範囲に影響し、社会へ与えた影響は甚大なものでした。社会における電気の重要性・必要性を肝に銘じ、電力系統を守るという責任を果たせるよう、今後も自分を磨いていきたいと思います。

(九州電力株)

## 学生の声

古澤 健（電気工学専攻・D3）

私は大阪大学で9年間学生として、様々な経験を積み、多くのことを学ばせて頂きました。後半の6年間においては、電気工学専攻の辻研究室に所属し、先生方のご指導の下で研究・勉学に勤しんでいました。

この6年間のうち前半の3年間は研究室内に多くの同期や先輩方がいたため、私が研究やその他のことで迷ったときに相談すれば、先生方のみならず同期や先輩方からアドバイスを得ることが可能でした。この3年間では、学部生時代では得ることができなかつた経験や知識を得ることができました。この当時は多くの方からアドバイスを得ることができる環境を当然の環境であると思っておりました。

そのため、当時、自分の苦手な分野である計算機の管理に関して、私は同期や先輩の指示待ちであり、指示されたことだけを行っておりました。

結果として、修士2回生の終わり頃まで自分が主に使用している計算機の状況を把握することさえできておらず、計算機の管理等に関する学ぶ機会を逃していました。このことは学生として恥ずべき点であると反省しています。

後半の3年間は私自身が博士課程に進学していたため、自らの研究を進めることだけではなく、微力ながら後輩の研究活動を支援させていただいておりました。このことにより、それぞれの研究に対して狭い範囲からだけでなく、多角的に捉えることができるようになりました。この結果、別視点から自分の研究を考えることができますようになりました。

また、辻先生が企画・提案されている「米国夏期研修」に参加することができ、1ヶ月間を米国のワシントン大学で過ごしました。この期間中に英語によるプレゼンテーションに関する講義やワシントン大学の先生方の専門研究に関する講義を受講しました。また、ワシントン大学の博士課程の学生と話し合う機会があり、ワシントン大学の大学院生の生活などを知ることができました。ワシントン大学の博士課程の学生や大阪大学の他分野の学生とのコミュニケーションにより、違う分野の方々の研究に関するアプローチの仕方を知ることができ、この研修は非常に良い経験になりました。

研究室で得たこれらの経験を糧に、向上心・探究心を絶やすことなく社会に出て精進したいと考えております。最後に私の9年間の学生生活に対して、寛大なる理解をもって支援してくれた先生方、父母・姉、研究室のメンバーに感謝しています。

蔡 菁（マルチメディア工学専攻・D3）

私が中国から大阪大学に来て、そろそろ3年半が経ちます。今年の3月に博士後期課程を卒業しました。最初に家族と離れて一人で日本に留学することを決断するときは3年半という期間は長いように感じましたが、今振り返ってみると、長い人生のなかで、日本に留学して、大阪大学に入學し、西尾研究室に入ることができ、本当によかったですと思っています。留学するにあたって、新しい領域で研究を行い、さまざまな知識を得られました。また、異なる文化や習慣を体験し、視野を広げることができました。

大阪大学では、恵まれた環境で学問や研究を進めることができます。単に設備が十分備わっているだけではなく、企業の研究機構や海外の大学などの連携が密接で、企業の技術者や海外の研究者たちの意義深い講演を常に聴講できます。また、学生にも、日本国内の学会だけではなく、トップレベルの国際会議に参加する機会が与えられ、同じ分野の研究者や第一線で活躍している研究者と接触できます。このような経験は私にとって非常に貴重な体験となりました。

留学期間中には、大学で研究を進める一方で、着物の試着やお餅つきなど日本の伝統が体験できる活動に参加し、景色のよい名所やトヨタの自動車工場、ボランティアとして田舎の小学校を訪れるなど、さまざまな面から日本の文化と社会に触れることができました。さらに、いろいろな国から来られた留学生とも知り合いになり、習慣の違いに戸惑いながらも、さまざまな文化を知り、充実した留学生活を送ることができました。

日本に留学したことは私の人生にとって重要な一部分になりました。3年間半の間に、言葉や生活、研究などで悩んだこともありましたが、そんな時に、周りの多くの日本人からたくさん助けていただきました。特に西尾研究室の先生方や学生達には大変お世話になり、皆様と楽しく研究を進め、一緒に仲良く遊ぶことができました。この場を借りて心より御礼を申し上げます。

最後になりましたが、卒業するにあたり、西尾研究室および大阪大学の今後一層のご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

#### 原田 諭（電気電子情報工学専攻・情報通信工学コース・D 2）

先生から濱電の『学生の声』の執筆を依頼され、何について書こうかいろいろと考えた末、今までできっちりとお礼を言う機会もなく今回が良い機会だと思ったので、両親への感謝の気持ちを書こうと思い立ちました。誌面をお借りして両親への感謝を記させて頂きたいと思います。

月並みな言葉しか思い浮かびませんが、両親には本当に感謝しています。特に金銭面では両親に大きな負担をかけていると思います。両親の本音としては地元の大学へ通ってもらいたかったようですが、(私のわがままで)県外の大学へ一人暮らしをしながら通わせてもらい、さらには大学院へも進学させてもらっています。単純に、大学に入学してから授業料、家賃、生活費など7年間で総額1000万円以上も負担をかけている計算になります。これは両親にしてはかなりの大金であり、私が地元の大学へ通っていれば、その大半は両親の老後の資金になっていたはずのお金です。また、私が一人暮らしをしていたり、バイクで大学に通ったりしているため、両親の気苦労も絶えないと思います。私は月に数回ではありますが実家に電話をかけます。その度に、「風邪には気をつけなさい。」とか「事故には気をつけなさい。」などと毎回のように注意されます。「金銭的な負担や気苦労なんて、親なら普通のことでは？」という意見もあるかもしれません、私はその様な心遣いをしてくれる両親に本当に感謝しています。

私は今年で26歳になりますが、今まで親孝行らしいことを何もしたことがなく、最近では親孝行として自分に何ができるのかと考えるようになりました。私個人の考えとしては、一番の親孝行は『両親と一緒に居ること』だと思います。(先にも書きましたが、老後の資金を私の学費などに充ててもらっているわけですから、)特に父親が定年退職をした後は一緒に暮らした方が良いと思うのですが、そう簡単には行きそうにありません。その理由としては、両親は地元から出て生活をしたことはなく、父親の定年退職後も地元で生活したいと考えているそうですが、私の行動範囲は年をとるに連れて広がる傾向にあり、『就職などを機に地元へ帰る』といったことはないであろうからです。この問題は簡単に解決できるものではないと思いますが、父親の定年退職まで10年弱ありますので、より良い解決策を模索したいと思います。

#### Ng Wee Hia（電気電子情報工学専攻・量子電子デバイス工学コース・M 2）

わたしはシンガポールの家族や友達から離れて一人で暮らすことを今まで一度も考えたことがありませんでした。しかし、高校時代に「卒業したら海外留学がしたい」と友達から話を聞き、そのとき初めてわたしにも留学したいという気持ちがわいてきました。

そして日本国政府文部省（現文部科学省）の奨学金を申し込み、2000年4月に来日しました。

初めの一年間は大阪外国语大学で日本語の勉強をしていたのですが、当初は言語の壁をすごく感じていました。ひらがながら勉強を始めたわたしにとっては、どこへ出かけても言葉が理解できず、日本にいることはまるで宇宙にいるかのように感じたほどです。

しかし、幸い外国人の友達がいたことと日本語の先生の指導のおかげで、時間の経過とともにある程度は自由に日本語が使えるようになりました。

そして2001年4月に学部1年生として大阪大学工学部電子情報エネルギー学科に入学しました。その頃には日本語がだいぶ自由に使えるようになっていたものの、授業についていくのはやはりまだ厳しく感じていました。しかし、大阪大学では留学生のためのチューター制度があり、チューターさんや他の日本人、留学生の友達のおかげで授業が少しづつ理解できるようになりました。

そして学部4年生のときには研究室に配属されました。みなさん研究に熱心でわからないことがあると先生や先輩が教えてくれます。もちろんそれだけではなくプライベートなことでも面倒をみてくれたり、相談にのってくれたりもしました。さらに研究室は研究だけの場ではなく、スポーツ大会や研究室旅行、飲み会など楽しいイベントがたくさんありました。

一方で研究室は小さい日本のように見えました。上下関係がわたしにとって時々きつく感じたからです。先輩を尊敬したくないわけではないのですが、親しい関係を作りたいと思っても上下関係が存在することで人間関係に壁を感じていました。

それからもう一つ気になりました。日本は同質社会なので、みんな似たような考え方をしているせいか「他の国の人も一緒だ。」「自分達と同じ考え方をしているはずだ。」などと当たり前に思っているように感じました。しかし、みんなが同じ考え方を持っているとは限りません。育ってきた国や文化によって物事の見方や考え方方が異なるので、互いに理解を深め、お互いのやり方を尊重しあわなければ人間同士の繋がりが困難になると思います。

わたしは日本で7年間生活をしてきて日本人と留学生の考え方、との付き合い方などを学びました。そしてこの7年間の留学期間で自分は大きく成長したと感じています。

社会人になって今の研究とは違う分野に進むことになっても、今まで学んだことを生かして頑張りたいと思っています。最後にこの7年間、様々な場面でご指導くださった先生方を始めみなさんに心よりお礼を申し上げます。

### 会員業務の一部外部委託および名簿発行のお知らせ

濁電会では会員データベースおよび会費の納入状況管理業務に対して主として学生アルバイトで対応して参りましたが、平成17年4月から「個人情報保護法」の全面施行により、氏名、住所、電話番号等の個人情報の取り扱いをよりいっそう厳密に行う必要が出てまいりました。これに伴い濁電会では会員情報の取り扱い方法を検討してまいりましたが、適切な業者に会員の個人情報管理の委託を行い、信頼性を一段と高くすることにいたしました。委託業者は同窓会の名簿管理について多くの実績があり、かつプライバシーマークを取得している小野高速印刷（株）とし、会員データベース管理および会費納入状況の管理を委託いたしました。会員各位のご理解をお願いいたします。

なお、一時保留としておりました名簿発行を平成19年度に行うことで準備を進めておりますが、これに伴う会員データベースの整備について小野高速印刷（株）を通じて調査を行うこととしております。ご協力のほどよろしくお願ひいたします。また、会員名簿の配布は今回より希望者に限定することといたしました。

名簿担当幹事 伊瀬敏史

## 会員の方々のご活躍

### 受賞（学会賞・学会フェロー称号等）

角所 収 先生（通信・昭25）  
瑞宝中綬章

元田 浩 先生  
Distinguished Contribution Award (Pacific Asia Conference on Knowledge Discovery in Database)

池田博昌 先生（通信・昭34）  
電子情報通信学会功績賞

滝根哲哉 先生  
システム制御情報学会論文賞

森 勇介 先生（電気・平元・M3）  
第4回産学官連携功労者表彰・科学技術政策担当大臣賞  
第20回 独創性を拓く先端技術大賞・特別賞  
平成18年度大阪大学教育・研究功績賞

平松綾子 先生（情報システム・平7・M8・D10）  
薦田憲久 先生（電気・昭47・M49）  
電気学会学術振興賞進歩賞

北村喜文 先生  
Winning Poster (14th Annual Medicine Meets Virtual Reality Conference)  
日本バーチャルリアリティ学会貢献賞

斗内政吉 先生  
レーザー学会論文賞（オリジナル部門）

溝口理一郎 先生  
人工知能学会論文賞  
人工知能学会研究会優秀賞  
The 14th International Conference on Computers in Education Best Paper Award  
The 14th International Conference on Computers in Education Best Student Paper Award

西尾章治郎 先生  
原 隆浩 先生（情報システム・平7・M9）  
平成17年度日本データベース学会論文賞

熊谷貞俊 先生  
宮本俊幸 先生（電気・平4・M6・D9）  
James C. Hung Best Paper Award in Factory Automation (IEEE International Conference on Emerging Technologies and Factory Automation)

戸出英樹 先生（通信・昭63・M2）  
電子情報通信学会平成18年度通信ソサイエティ活動功劳賞

木下和彦 先生（情報・平8・M9）  
電子情報通信学会平成18年度通信ソサイエティ活動功劳賞

八木哲也 先生  
小山内実 先生  
生体医工学シンポジウムベストリサーチアワード（日本生体医工学会）

佐々木孝友 先生（電気・昭42・M44）  
森 勇介 先生（電気・平元・M3）  
第1回モノづくり連携大賞・特別賞

田中和夫 先生（電気・昭49・M51・D58）  
兒玉了祐 先生（電気・昭60・M62・D平2）  
2006 Award for Excellence in Plasma Physics Research (米国物理学会)

新田直子 先生  
馬場口登 先生（通信・昭54・M56）  
Pacific-Rim Conference on Multimedia (PCM2006) Best Paper Award

馬場口登 先生（通信・昭54・M56）  
電子情報通信学会情報システムソサイエティ活動功劳賞  
平成18年度大阪大学教育・研究功績賞

藤井彰彦 先生（電子・平5・M7・D9）  
尾崎雅則 先生（電気・昭58・M60・D63）  
ICNME 2006 Award (The 7th International Conference on Nano-Molecular Electronics)

村上孝三 先生（電子・昭46・M48）  
戸出英樹 先生（通信・昭63・M平2）  
第6回ネットワークシステム研究賞（電子情報通信学会 ネットワークシステム研究専門委員会）

尾上孝雄 先生（電子・平3・M5）  
平成18年度大阪大学教育・研究功績賞

薦田憲久 先生（電気・昭47・M49）  
平成18年度大阪大学教育・研究功績賞

### 就任（学会の要職等）

溝口理一郎 先生  
Vice President of Semantic Web Science Association  
2005年11月8日  
人工知能学会会長  
2006年6月8日

# 教室情報

## ▼平成19年度電気電子情報工学専攻役割分担

### 大学院専攻

電気電子情報工学専攻長	河崎善一郎	教授
電気電子システム工学部門長	伊瀬 敏史	教授
情報通信工学部門長	馬場口 登	教授
量子電子デバイス工学部門長	尾崎 雅則	教授
システム・制御・電力工学コース長	谷野 哲三	教授
先進電磁エネルギー工学コース長	上田 良夫	教授
情報通信工学コース長	井上 恭	教授
量子電子デバイス工学コース長	伊藤 利道	教授

### 学部学科

電子情報工エネルギー工学科長	岸野 文郎	教授
電気工学科目長	伊瀬 敏史	教授
通信工学科目長	井上 恭	教授
電子工学科目長	近藤 正彦	教授
情報システム工学科目長	中前 幸治	教授
システム制御電力コース長	谷野 哲三	教授
先進電磁エネルギーコース長	上田 良夫	教授
量子電子デバイスコース長	森田 清三	教授
情報通信工学コース長	中前 幸治	教授

### 就職担当

電気系就職担当代表窓口	井上 恭	教授
電気電子システム工学部門 就職担当	上田 良夫	教授
情報通信工学部門 就職担当	井上 恭	教授
量子電子デバイス工学部門 就職担当	杉野 隆	教授

## ▼電気系人事（平成18年4月2日～平成19年4月1日）

佐々木孝友	教 授	定年退職	19. 3. 31	量子電子
辻 賀一郎	教 授	定年退職	19. 3. 31	電気電子
中塚 正大	教 授	定年退職	19. 3. 31	レーザー研
鷹岡 昭夫	教 授	定年退職	19. 3. 31	電顕センター
上田 良夫	教 授	昇 任	18. 7. 1	電気電子
重森 啓介	助教授	昇 任	18. 7. 1	レーザー研
長友 英夫	助教授	昇 任	18. 7. 1	レーザー研
鷺尾 隆	教 授	昇 任	18. 8. 16	産研
本多 信一	助教授	昇 任	18. 12. 1	量子電子
三浦 克介	助教授	昇 任	19. 2. 1	情報科学

西 竜治	准教授	昇任、異動	19. 4. 1	電顕センター (量子電子 兼任)
小山内 実	講 師	昇 任	19. 4. 1	量子電子
衣斐 信介	助 手	採 用	18. 9. 1	情報通信
竹内 亨	助 手	採 用	18. 10. 1	情報科学
前田 太郎	教 授	採 用	19. 2. 1	情報科学
猪口 明博	助 教	採 用	19. 4. 1	産研
宋 文杰	助教授	転 出	18. 8. 31	量子電子 (熊本大学医学部 教授)

\*電気電子=電気電子システム工学部門

情報通信=情報通信工学部門

量子電子=量子電子デバイス工学部門

情報科学=情報科学研究科

レーザー研=レーザーエネルギー学研究センター

産研=産業科学研究所

電顕センター=超高压電子顕微鏡センター

センター、研究所等の協力講座の人事異動を含みます。  
また、平成19年4月1日より助教授は准教授、学内講師・助手は助教になりました。（情報科学研究科では一部例外もあります。）

## ▼母校の教壇に立つ会員（平成18年度）

・電気工学科目「産業社会と工学倫理」
関西電力（株）顧問
岸田 哲二（電気・昭38）
・通信工学科目「情報社会と職業」
三菱電機（株）先端技術総合研究所・蓄積メディア技術部 部長
小川 雅晴（電気・昭53・M55）
・通信工学科目「情報社会と職業」
三菱電機（株）先端技術総合研究所・システム最適化技術部 部長
熊澤 宏之（通信・昭56・M58・D平10）
・情報システム工学科目「ソフトウェア工学」
（株）NSソリューションズ関西 産業ソリューション部 取締役部長
森久 博（情報・D平12）
・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅰ」
JFEスチール（株）西日本製鉄所 主任部員（副部長）
高橋 暢（電子・昭55・M57）

- ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅰ」  
JFEスチール（株）西日本製鉄所熱延制御室 室長  
村山 薫（電気・昭60・M62）
- ・電気電子情報工学専攻「離散事象システム論」  
川崎重工業（株）技術開発本部システム技術開発セ  
ンターシステム開発部 第三グループ参与  
長尾 陽一（電子・昭47・M49）
- ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅲ」  
(株) NTTドコモ プロダクト部 部長

- 永田 清人（通信・昭55・M57）
- ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅲ」  
西日本電信電話（株）設備部 企画／設備GD部門長  
高橋 成剛（通信・昭56）
- ・電気電子情報工学専攻「特別講義Ⅲ」  
関西電力（株）経営改革・IT本部 情報通信技術グ  
ループ チーフマネジャー  
橘 俊郎（通信・昭61・M63）

#### ご寄付

平成18年度には以下の方々からご寄付を頂いております。ここに記して厚く御礼申し上げます。

また、鈴木会長からのあいさつ文にもありましたように、平成18年9月に会費免除者（卒業後52年以上経過した会員）に誤って会費請求が行われるという事故が発生致しました。今年度のご寄付は、誤請求に伴い会費納入された会費免除者の方から、ご本人の申し出により納入金を寄付していただいたものです。また、葉書によるご請求のお詫びの送付や、電話による事務局からの問合せの結果、返金の申し出をされなかった会費免除会員の皆様からの納入金も、寄付扱いとさせていただきました。改めて、今回の事故を心よりお詫びするとともに、今後同様のミスが発生しないよう、本会の運営に務める所存です。

#### 会費誤請求に伴うご寄付

草野光男 様（電学・昭和6）	¥4,000	上山基明 様（電学・昭和8）	¥4,000
小池吉郎 様（電学・昭和16）	¥4,000	湯川莊介 様（電学・昭和16）	¥4,000
大木正路 様（電学・昭和17）	¥4,000	谷口義男 様（電学・昭和17）	¥4,000
櫻井良文 様（電学・昭和18）	¥4,000	小嶋三郎 様（電学・昭和19）	¥4,000
和田 弘 様（電学・昭和19）	¥4,000	行徳直道 様（電学・昭和22）	¥4,000
小林啓次郎様（電学・昭和22）	¥4,000	相田襄治 様（電学・昭和23）	¥4,000
三上彦三 様（電学・昭和23）	¥4,000	中川隆二 様（電学・昭和24）	¥4,000
成松啓二 様（電学・昭和25）	¥4,000	米山三男 様（電学・昭和25）	¥4,000
対尾準三郎様（電学・昭和26）	¥4,000	久米敏之 様（電学・昭和28）	¥4,000
後藤業明 様（電学・昭和28）	¥4,000	西馬重幸 様（電学・昭和28）	¥4,000
丹羽正信 様（電学・昭和28）	¥4,000	廣井恂一 様（電学・昭和28）	¥4,000
古田巧一 様（電学・昭和28）	¥4,000	楊 聰哲 様（電学・昭和28）	¥4,000
水谷 博 様（通学・昭和19）	¥4,000	九里聖敏 様（通学・昭和20）	¥4,000
滑川敏彦 様（通学・昭和20）	¥4,000	増田 修 様（通学・昭和20）	¥4,000
河野哲朗 様（通学・昭和23）	¥4,000	山野政信 様（通学・昭和23）	¥4,000
業天正文 様（通学・昭和24）	¥4,000	竹内信雄 様（通学・昭和25）	¥4,000
難波 進 様（通学・昭和25）	¥4,000	西田昌弘 様（通学・昭和25）	¥4,000
満保正喜 様（通学・昭和25）	¥4,000	錦織 享 様（通学・昭和26）	¥4,000
岩橋照夫 様（通学・昭和27）	¥4,000	金子 博 様（通学・昭和27）	¥4,000
坂本忠臣 様（通学・昭和27）	¥4,000	西村元一 様（通学・昭和27）	¥4,000
毛利悦造 様（通学・昭和27）	¥4,000	大西 博 様（通学・昭和28）	¥4,000
鍋嶋 壽 様（通学・昭和28）	¥4,000	東島隆治 様（通学・昭和28）	¥4,000
藤戸幹夫 様（通学・昭和28）	¥4,000		

## 澁電会役員

平成18年度澁電会本部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。○印は平成18年度、新たに就任された役員です（敬称略）。役員氏名の他に、連絡先を付記しておりますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

### [本部]

#### 会長

鈴木 肇（電気・昭33） 兵庫県立大学

#### 副会長

三坂 重雄（電子・昭38） シャープ（株）  
池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学  
○坂入 修二（電気・昭47修） 四国電力（株）  
田中 祉捷（電気・昭37） 早稲田大学  
山本 勝（電子・昭42） 名古屋工業大学  
白髪 修一（電気・昭46修） 中国電力（株）  
○宮田 昌近（通信・昭40） 金沢工業大学  
辻 穀一郎（電気・昭41） 阪大工電気電子

#### 幹事

中塚 正大（電気・昭41） 阪大レーザー  
田中 和浩（電気・昭49） （株）ダイヘン  
北山 研一（通信・昭49） 阪大工量子電子  
横川 正道（電子・昭49） 住友電気工業（株）  
○亘 信二（通信・昭50） 南海電気鉄道（株）  
山田富美夫（電気・昭51） （株）東芝  
松永 豊己（通信・昭51） 日本電気（株）  
○中前 幸治（電子・昭52） 阪大情報科学  
小川 雅晴（電気・昭53） 三菱電機（株）  
庄中 永（通信・昭54） オムロン（株）  
○松井 謙二（通信・昭54） 松下電器産業（株）  
○天野 督士（電気・昭55） シャープ（株）  
伊瀬 敏史（電気・昭55） 阪大工電気電子  
中井 光男（電気・昭55） 阪大レーザー  
長尾 哲（電子・昭55） 三菱電機（株）  
○岸元 泰親（電子・昭57） シャープ（株）  
内海 利也（電気・昭58） 西日本旅客鉄道（株）  
○尾崎 雅則（電気・昭58） 阪大工量子電子  
黒部 彰夫（電気・昭58） 松下電器産業（株）  
田辺 達也（電子・昭58） 住友電気工業（株）  
○壇 徹（電子・昭58） 三洋電機（株）  
橘 俊郎（通信・昭61） 関西電力（株）  
藤田 卓志（電子・昭61） （株）富士通研究所  
○森 伸也（電子・昭61） 阪大工量子電子

佐伯 修（電気・昭62） 阪大工電気電子  
○米田 秀弥（通信・昭62） 西日本電信電話（株）  
宮本 伸一（通信・平2） 阪大工情報通信  
山田 佳弘（通信・平2） （株）日立製作所  
○前川 浩二（通信・平4） 関西電力（株）  
○原 隆浩（情報・平7） 阪大情報科学  
○吉村 尚洋（電気・平12） 三洋電機（株）

連絡先：〒565-0871 吹田市山田丘2-1  
大阪大学 大学院工学研究科 電気系内  
澁電会事務局 安井晴子  
TEL：06-6879-7789（ダイヤルイン）  
FAX：06-6879-7774  
E-mail：reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

## 支部連絡先

電気会支部としては、東京、東海、北陸、中国、四国、九州支部が活動を行っています。各支部役員としてご尽力頂いております方々は下記のとおりです（敬称略）。最新の連絡先を付記しておりますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

### [東京支部]

支部長

池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学

代表幹事

村上 敬一（電子・昭49） （株）富士通  
川野 強（通信・昭45） 住友電工ネットワークス（株）

事務局

福山 訓行（通信・昭55） （株）富士通研究所  
〒211-8588 川崎市中原区上小田中4-1-1  
(株)富士通研究所 パーソナルシステム研究センター  
TEL：044-754-2575  
FAX：044-754-2646  
E-mail：noriyuki@jp.fujitsu.com  
片山 誠（電気・昭62） 住友電気工業（株）  
〒244-8588 横浜市栄区田谷町1  
住友電気工業（株）光通信研究所 光部品研究部  
TEL：045-853-7167  
FAX：045-851-1557  
E-mail：katayama-makoto@sei.co.jp

### [東海支部]

支部長

山本 勝（電子・昭42） 名古屋工業大学

代表幹事・事務局

片山 正昭（通信・昭56） 名古屋大学  
〒464-8603 愛知県名古屋市千種区不老町  
名古屋大学 エコトピア科学研究所情報・通信科学研究部門  
TEL：052-789-4430  
FAX：052-789-3173  
E-mail：katayama@nuee.nagoya-u.ac.jp

### [北陸支部]

支部長

○宮田 昌近（通信・昭40） 金沢工業大学

代表幹事・事務局

山田 省二（電子・昭49）  
北陸先端科学技術大学院大学

〒923-1292 石川県能美市旭台1-1

北陸先端科学技術大学院大学

TEL：0761-51-1460

E-mail：shooji@jaist.ac.jp

### [中国支部]

支部長

白髭 修一（電気・昭46修）中国電力（株）

代表幹事・事務局

三川 玄洋（通信・平3） 中国電力（株）  
〒730-8701 広島市中区小町4-33  
中国電力（株）経営企画部門 電源計画担当  
TEL：050-5521-1201  
E-mail：358870@pnet.energia.co.jp

### [四国支部]

支部長

○坂入 修二（電気・昭47修）四国電力（株）

代表幹事・事務局

尾田 牧弘（電気・昭57） 四国電力（株）  
〒760-8501 高松市亀井町7  
四国電力（株）高松支店 電力部 系統技術課  
TEL：050-8801-8320  
FAX：087-836-0637  
E-mail：oda11405@yonden.co.jp

### [九州支部]

支部長

田中 祐捷（電気・昭37） 早稲田大学

代表幹事

金籠 敬一（電気・昭46） 九州工業大学  
事務局

服部 励治（電気・昭61） 九州大学

〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1  
九州大学 大学院システム情報科学研究科  
電子デバイス工学専攻

TEL：092-642-4012

FAX：092-642-4015

E-mail：hattori@ed.kyushu-u.ac.jp

## 同窓会だより

### 電気・通信昭和26年卒合同同窓会

日 時：平成18年10月25日（水）  
場 所：大阪大学中ノ島センター会議室  
出席者：（写真前列左から）  
浅居、岩澤、宮本、三宅、長岡、永田  
(後列左から)  
今村、金田、小山、尾塙、山縣、絹川、  
岡本、対尾、栗山、近藤  
計 16名



昭和26年卒の電気・通信両学科の合同同窓会は、5年毎に開催していますが、本年は大阪大学中ノ島センターで行われました。いつも恩師をお招きしているのですが、残念ですが、本年は他の行事との関係や、ご健康上の都合で卒業生だけになりました。また恩師の宮脇一男先生に続いて、このたび尾崎 弘先生がご逝去になられました。ここに謹んで哀悼の意を表したく存じます。学科ごとの同窓会は毎年開催していますが、このように合同となりますと、久しぶりに会う方が多く、学生時代の合同の講義や、卒業後の同じ職場についての話題が出て、懐かしいひと時を過ごしました。卒業後55年になりますが、電気が在籍36名中12名がご他界、通信は在籍33名中14名がご他界になり、年々淋しくなります。故人のご冥福を祈りつつ、生存者一同は、ご病気の方も多いのですが、健康に留意し、元気を出して来年の各学科同窓会に多く集まれるように期待しています。

（浅居 記）

### 電気昭和27年卒さんもく会東部ミニ同窓会

日 時：平成18年8月30日（水）  
場 所：東京 京王プラザホテル 樹林  
出席者：（写真左より）  
井手、飯尾、林、喜多村、末内  
計 5名

卒業以来54年余り、愛知県以東のさんもく会東部（鷹電、26号、2005／4月参照）在住10名の大半が、本人や家族の事情で同窓会として集まることは無理であると、諦めていました。しかし、今夏東京周辺在住者で都合のつく人だけでも何とか集まろうとの声がきっかけとなり、当日所用で参加できない松村睦夫君を除いてミニ同窓会を開催することができました。

少人数とは言え、陸士59期、60期、クラスきっての秀才と臭才、超堅物と軟派、また2名は大正生まれの傘寿と誠にバラエティに富んだ集いとなりました。

浦島太郎のように、半世紀ぶりの再会に昔の面影を探し求める人、一目で誰と判る人、様々な変貌に歳月の重さをあらためて嘆息しました。

話は、当然、恩師のこと、学生時代のエピソード、同級生の消息や人物談に始まり、果ては時局論から女性談議に到るまで四方八方に話題が飛び交う誠に楽しい会合となりました。

歓談2時間、これを機に今後も気楽に又会いましょうと語り合ひながらの散会となりました。

（喜多村 記）



## 通信昭和32年卒ゴルフ懇親会

日 時：平成18年4月17日～18日

場 所：パナヒルズ大阪

出席者：入江、大西、岡崎、岡本、木村、小杉、  
阪本、佐々木（寛）、佐々木（正）、真常、  
竹村、田部、辻、寺田、野口、長谷川（晃）、  
長谷川夫人、長谷川（利）、蜂谷、久田、  
藤井、堀、三善、三善夫人、山本、吉村

計 26名



本来なら、有志による「ゴルフ懇親会」のはずであった。しかし今回は、久しぶりの関西における開催でもあり、前夜の宴会の場に、ゴルフをやるやらないに関係なく、声をかけてみようという話になった。

半世紀前の春、胸をふくらませて卒業したのは、43名であった。だがいま、すでに6名の友を失っているのが、哀しい。それにしても、24名、加えて夫婦二組、計26名の参加を得て、盛大な集いになったことは、望外の喜びであった。

20歳前後の利害打算などの混ざっていないつきあいは、いつまで経っても、やはり貴重なものであった。お互い、72歳という年齢相応の健康を語り合いながら交わす酒の席は、いつ尽きるとも知れなかった。

翌日は、晴天に恵まれ、「ゴルフ組」と「散策組」とに別れ、それぞれ茨木国際ゴルフ俱楽部と花の京都にて、健康的な雰囲気を満喫した。

来年、平成19年は、われわれにとって節目の年になる。「50周年記念同窓会」を、大々的に打ち上げようと言ふことで気勢を上げた。  
(大西 記)

### 澪電会会費納入のお願い

澪電会の財政状況は、諸般の事情により非常に厳しい状況にあります。本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発にするために、何卒、平成19年度会費（4,000円）の早期納入（できれば6月末日まで）にご協力賜りますようお願いする次第であります。卒業年度の新しい会員各位の納入率が低くなっています。卒業して間もない方々も、是非ご協力のほどお願い申し上げます。

会費納入の便宜を図るため、銀行口座からの会費自動振込制度およびコンビニエンスストアでの会費納入システム（平成12年10月から導入）も採用しておりますので、是非ご利用下さい。なお、平成19年5月より、コンビニエンスストアでの会費納入システムの取扱業者を変更することになりました。平成19年4月以前に比べ、会費の納入が可能なコンビニエンスストアが若干変更しておりますので、ご利用の際にはご注意下さい。また、自動振込の銀行口座を変更ご希望の場合は、澪電会事務局までご一報くだされば、折り返し口座変更手続きに必要な預金口座振替依頼書をご送付いたします。

なお、大学学部卒業時から53年を経過した方（平成19年度会費の場合、学部卒業が昭和29年以前の方）の会費は免除になっておりますので、納入の必要はございません。また、未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。

会計幹事

# 濬電会だより

## 濬電会ホームページのご案内

平成12年度から開始した濬電会ホームページでは、本会の各種内容をより積極的に会員の皆様にお伝えするとともに、皆様の利便性の向上を目指して情報公開に励んでおります。平成15年6月よりは、大阪大学工業会（会長：鈴木 肥 元学部長）のホームページであるTechno-Net Web (<http://www.osaka-u.info/>) のサーバのもと、下記アドレスからアクセス可能となっています。

<http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

主な内容と致しましては、お知らせ、会長ご挨拶、会則、濬電会ニュース、母校のニュース、会費納入方法、個人情報の変更、濬電会役員一覧、関連リンク等となっております。一昨年度からは会報「濬電」の閲覧も可能となっています。現在、昭和55年発行の創刊号から昨年度発行の第27号までが掲載されています。さらに、各支部のホームページへのリンクも作成しております。

今後は、個人情報の保護の観点からセキュリティの向上を図っていくなど、インターネットの急速な普及のもとで、会員の皆様にとってより役立つシステムになるように努めていきたいと考えております。

益々の充実化を図るため皆様のご意見を下記担当幹事まで頂戴できれば幸でございます。

（森 伸也 nobuya.mori@eei.eng.osaka-u.ac.jp  
(電子・昭61) 記)

## 平成18年度 総会・講演会・懇親会

平成18年6月2日（金）大阪梅田・新阪急ホテルで135名の参加者を得て行われた。総会に先立って、「花の間」で午後5時から平成18年度濬電会講演会が開催された。辻毅一郎教授（電気・昭41）から「需要家サイドから見たCO<sub>2</sub>排出削減」、佐々木孝友教授（電気・昭42）から「新結晶と産業にもたらすもの」と題してお話をいただいた。いずれも長年の研究成果に基づいた興味深い有益な講演であった。

総会は同じく「花の間」で午後6時30分から伊瀬敏史幹事（電気・昭55）の進行役のもとで行われた。鈴木肥会長（電気・昭33）の挨拶の後、平成17年度事業

報告が谷口研二総務幹事（電子・昭46）から、また平成17年度決算報告が北山研一会計幹事（通信・昭49）から行われ、それぞれ承認された。次に鈴木会長から新幹事18名の指名と司会者より紹介が行われ、拍手をもって承認の後、北山研一 新総務幹事から平成18年度事業計画案が、中前幸治 新会計幹事（電子・昭52）から平成18年度予算案の説明が行われ、いずれも承認された。

懇親会は会場を「紫の間」に移して北山 新総務幹事の司会のもとで行われた。鈴木会長の挨拶の後、宮原秀夫 大阪大学総長（通信・昭42）から大学の最近の動きを交えてのご祝辞、続いてシャープ株取締役・技術本部長の千葉徹氏（電子・昭47）からご祝辞を頂戴した。各支部から頂いた祝電の披露後、前会長の大西良一氏（通信・昭32）の音頭で乾杯し、賑やかな歓談のひとときを持った。最後に副会長であるシャープ株常任顧問の三坂重雄氏（電子・昭38）のご発声のもと万歳三唱を行い、盛会裏に散会となった。

（伊瀬敏史（電気・昭55）記）

## 舞鶴石炭火力発電所見学会

平成18年11月13日（月）、抜けるような晩秋の青空のもと、不自由な足で見送ってくれた安井さんを新大阪駅に残し、舞鶴火力発電所見学バスは予定通り発車しました。参加者33名を乗せ、播但若狭道をあまりにも快調に走り、予定時刻より早く最初の目的地（昼食会場）に到着、幹事を困惑させてくれました。櫻井良文元会長の昔語りのスピーチに助けられ、『間が持つのだろうか？』との幹事の心配をよそに、1時間あまりの昼食会は和気あいあいの歓談で無事終了、食後の湾岸の散歩も楽しく、12時過ぎに出発しました。

今回の見学会の目玉は、平成16年8月に営業運転を開始した関西電力舞鶴火力発電所です。鶴が羽を広げた姿を連想させる美しい斜張橋（その名も舞鶴クレーンブリッジ）を渡り、2つのトンネルを抜けると目の前に、巨大な三角帽子の円筒3基が出迎えてくれました。直径60m、高さ77mの石炭サイロは、一基当たり10万トンの貯炭量、国内最大だそうです。桟橋から続く密閉式のベルトコンベアは総延長3.5kmだと。兎に角デカイ。1基あたり90万kWという出力は、関西

電力の火力発電所としては最大で、それだけで、大阪府の半分の所帯の電力を賄えるのだそうです。効率に關しても、蒸気温度を高めることなどによって、プラント熱効率約43%を達成しています。何よりも、徹底した環境保全対策が行われており、甲子園球場26個分の敷地の6割が緑地で、その他のエリヤも綺麗に清掃されており、特別な臭いは一切ありませんでした。残念ながら、発電施設内部の見学はさせていただけませんでしたが、バスに乗って構内巡りで、それぞれの施設の大きさを実感させられました。バス内での会員からの質問と職員の応答はたいへん面白いものがありました。

発電所本体から1kmほど離れた舞鶴観海公園に係留されている船舶型PC館「エル・マールまいづる」のプラネタリウムで秋の夜空を楽しみながらしばし休息をとり、舳先の展望デッキより、発電所全景を眺め、発電所施設見学を終えました。この施設周辺は住民の魚釣り場としても楽しみを与えているようでした。

帰路、今は引揚桟橋として復元されている木造桟橋で、戦後13年間に66万もの引揚者を受け入れたというガイドさんの話を聞かされ、戦後の混乱期に思いをはせている間に、バスは、駆逐艦が停泊している海上自衛隊桟橋横を通り、今は民間倉庫となっている、薄汚れた旧海軍の煉瓦倉庫群を通り抜けていきます。正直、何だか、随分勿体ないことをしているような思いを抱いたのは私だけではなかったと思います。ご存じの方も多いと思いますが、舞鶴には、赤煉瓦博物館や海軍記念館といった旧海軍記念資料館があります。また「山椒太夫」由縁の地でもあり安寿姫の塚などもあります。実施計画案作成の段階で、日程、時間、交通の便を考え、本見学会では割愛せざるを得なかったことがとても残念です。今回のツアーでは、最後に「五老ヶ岳公園展望タワー」に立ち寄りました。郵政省の選になる「近畿百景」の第一位と言うだけのことはあり、360度の景観は、しばし癒しの時を与えてくれました。

バスは、予定通りに現地を離れ、順調に走り、ほぼ時間通りに帰阪致しました。幹事一同、天気に恵まれ、交通渋滞にも遭遇することなく、体調を崩された方もなく、最後まで、幸運な一日を送ることができましたことを喜んでおります。本見学会に関しましては、受け入れ先の関西電力の方々には、準備の段階から、大変お世話になりました。本誌をお借りしてお礼申し上げます。また、参加戴いた会員の方々には、幹事の不行届きにも拘らず、笑顔でお相手いただきましたことお礼申し上げます。 (平成18年度 見学会担当)

## 平成18年度電気系卒業祝賀・謝恩会

平成18年度電気系卒業祝賀会は平成19年3月23日(金)卒業式当日の午後6時から、千里阪急ホテル・仙寿の間において開催された。卒業生出席者数301名(情報システム工学科、情報科学研究科を除く)にご来賓、電気系職員、濬電会役員の方々をあわせて400名を越える出席者を得た。

式典の部は伊瀬敏史幹事(電気・昭55)の司会で進められ、最初に濬電会会长・兵庫県立大学副学長の鈴木胖先生(電気・昭33)から祝辞を戴いた。ついで兵庫県立大学学長・大阪大学元総長・名誉教授の熊谷信昭先生(通信・昭28旧)、シャープ株取締役・技術本部長の千葉徹様(電子・昭47)のご両名から来賓の祝辞を戴いた。その後、電気系教官代表として、電気電子情報工学専攻長の河崎善一郎先生(通信・昭48)からご祝辞を戴いた。最後に、濬電会東京支部長・東京情報大学教授の池田博昌先生から祝辞を戴き、各支部からの祝電の披露があり、パーティーに移った。

パーティーの部は森伸也幹事(電子・昭61)の司会で進められた。まず、濬電会副会長・シャープ㈱常任顧問の三坂重雄様(電子・昭38)のご発声で乾杯し、歓談に移った。宴もたけなわの頃、鈴木会長より工学賞の大谷芳明君(電気工学科)、河北龍之介君(通信工学科)、Kittichungchit Varutti君(電子工学科)への記念品の授与があった。ひきつづき、先端通信エキスパート養成プログラム・提案型研究プログラム最優秀研究課題の表彰式が行われ、河崎専攻長より、『視覚野神経回路ネットワークの生理学実験と数理モデル解析を用いた総合的研究』を実施した田中哲史君・石木達也君・潘振興君の研究グループ、ならびに、『自己組織化螺旋周期液晶を用いた複合型高速フォトニックデバイスの作製及び評価』を実施した吉田浩之君へ記念品の授与があった。その後、恒例の福引き、お餅つきが賑やかに行われ、ついで卒業生の代表として量子電子デバイス工学コース・博士前期課程の大森崇史君から教官および濬電会諸先輩への感謝と将来への決意が述べられた。最後に濬電会元会長・大阪大学名誉教授の藤井克彦先生(電気・昭28旧)の音頭で万歳三唱し、めでたく、祝賀・謝恩会はお開きとなった。

ご臨席賜り、祝辞を戴きましたご来賓の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご多用中にもかかわらず、臨席戴きました電気系職員の方々にお礼申し上げます。濬電会事務局の安井晴子様にはいつもながら献身的に会の準備にあたっていただき、さらには電気系秘書の方々、一部の学生諸君には準備・受付業務などをお手

伝い戴きました。これらの方々に心よりお礼申し上げます。今年も快く記念品、福引きの景品を寄贈戴きました株日立製作所、オムロン株、関西電力株、三洋電機株、シャープ株、住友電気工業株、株ダイヘン、株東芝、南海電気鉄道株、西日本旅客鉄道株、NTTグループ各社（西日本、データ、ドコモ関西、コムウェア、インターネット、スマートコネクト）、富士通株、松下電器産業株、三菱電機株、株ルネサステクノロジの各社様に厚く、お礼申し上げます。

（森 伸也（電子・昭61）記）

### 平成18年東京支部総会報告

平成18年濬電会東京支部総会が4月21日午後6時よりの芝弥生会館にて開催されました。ご来賓として、鈴木胖会長、谷口研二総務幹事、また、大阪大学工業会東京支部から副会長の喜多嶋浩様にご臨席頂きました。基礎工学部からのご参加17名を含め、総勢83名の盛会であります。

今回は、総会幹事会社のアレンジにて、「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用プロジェクト」と題した渡辺貞様（文部科学省 研究振興局 スーパーコンピュータ整備推進本部 研究振興官）の講演会を実施いたしました。

スーパーコンピュータの発展経緯や、さまざまな科学・工学の世界で利用されている状況を多くの実例を引きながら説明いただき、続いて、次世代のスーパーコンピュータに期待される性能が現状の二桁以上の性能を要求されており、その実現に官民を上げて取り組んでいる様子をお話いただきました。多くの会員も最先端のコンピュータ技術への興味が高く、懇親会にて質問攻めにあわれていた様子でした。

続く懇親会では、まず、池田博昌支部長から、卒業

生の世代間を結ぶ濬電会の活動をさらに発展させ、後進のフォローを進めたいとの挨拶があり、鈴木胖会長からは、わが国の活力源泉は科学技術であり、濬電会会員の更なる活躍を期待したいとのお言葉をいただきました。統いて、参加会員中、最高齢でいらっしゃる北澤不二彦氏のご発声にて乾杯、和やかな歓談のなか、谷口研二先生から濬電会、大学の近況をご報告いただきました。会終盤、次回幹事会社代表の原信吾氏（住友電工）から来年に向けた力強いご挨拶をいただきました。最後に、H17/H18年卒の若い会員の万歳三唱をもって総会全予定を盛会裏のうちに無事終了致しました。

（浅井（基制・昭47）、山元（工気・修昭55）、斎藤（工通・昭55）、岡ノ上（工通・修昭55）記）

### 平成18年度北陸支部総会・見学会報告

濬電会北陸支部は、11月11日（土）に石川県川北町で見学会を行うとともに、平成18年度総会（第17回）と懇親会を能美市、小松市でそれぞれ開催しました。本部より、鈴木胖会長、北山総務幹事をご来賓としてお迎えし、総会は総勢16名の参加となりました。

当日午前にJR金沢駅に集合した後、貸切バスにより能美市の北陸先端科学技術大学院大学に移動し、昼食をとった後総会を開催しました。天候は雨でした。総会では、交代した新旧支部長の挨拶等の後ご来賓の鈴木会長にお言葉を頂き、その後所定の議事日程（17年度事業、決算報告、18年度事業、予算案等の諸項目）を滞り無く終了しました。その後本部からの報告として北山幹事より「最近の大同工業大学と大同工業大学電気系学科・専攻について」と題したご講演を頂き、母校の近況についてお話を頂きました。この中では、電気系の人事・任期制のことや組織の再編、さらには少子化、大学全入というかつてない大学を取り巻く社会的状況の中で、理科離れ、電気系の人気低下等がホットな話題になり議論が弾みました。

続いて雨の中を再度移動して川北町の東芝松下ディスプレイテクノロジー株へ移動し、見学会を開催しました。見学会には16名の参加がありました。見学会では会社概要の説明が約1時間あり、その後見学ホールと工場内展望室へご案内頂き、最新の設備、成果の一端をご披露頂きました。なお、この際大同工業大学OBの方に、ご説明、ご案内等色々とお世話を頂きました。ここに感謝させて頂きます。

その後夕刻に懇親会会場である小松グランドホテル





に再度貸切バスで移動しました。この際本来好天であれば訪問予定であった白山市の白山ひめ神社（白山神社の總本山）は省略としました。懇親会（参加者14名）では、鈴木会長に再度ご挨拶を頂いた後、一人ずつ自己紹介と近況報告を行って親交を深め、午後8時頃散会しました。

（山田省二（電子・博昭54）記）

### 平成18年度東海支部総会報告

平成18年10月14日（土）、平成18年度瀬電会東海支部総会が名古屋市昭和区の名古屋工業大学2号館の見晴らしの良い11階のお部屋をお借りして開催されました。御来賓として瀬電会会长の鈴木胖先生、瀬電会総務幹事の北山研一先生をお迎えし、山本勝東海支部長をはじめ昭和35年卒から平成8年卒まで16名の支部参加者を得て盛会でした。

総会に先立ち、北山研一総務幹事により「最近の大坂大学電気系学科・専攻について」という題目でご講演を頂きました。全国の大学・電気系学科が共通で抱える課題、大阪大学での先進的な取り組みなど興味深い内容をご紹介頂きました。また本年度は、新しい試

みである交流会を開催しました。そこでは、東海支部所属の瀬電会会員有志6名が、各々の所属する企業・大学の活動と、そこで瀬電会会員の活躍を、スライドや会社パンフレットなども併用して紹介しました。

続く総会では、山本支部長による開会の御挨拶の後、鈴木胖瀬電会会长から御挨拶を頂戴しました。その中では、大阪大学の同窓会の連合会会长に熊谷元総長が就任され、大阪大学工業会の会長に鈴木会長が就任されることなどを御紹介頂きました。また今年は瀬電会四国支部総会も再開され、全ての支部を回られることになること、来年会長をご退任された後も、櫻井名誉教授に倣い、継続して各支部を回られるつもりであるとのお話を頂きました。その後、東海支部の事業と会計に関する報告と計画が原案通り承認されました。

総会終了後は、総会会場に近接する名古屋ビル園浩養園に徒歩で移動し、ビルで乾杯の後、会員の近況報告、趣味、生活から学術、技術にわたる幅広い話題で楽しいときを過ごしました。最後は、前支部長の佐治学先生（愛知工科大学）の音頭で万歳三唱をしてお開きとなりました。（片山正昭（通信・昭56）記）

### 平成18年度瀬電会中国支部総会

瀬電会中国支部は、11月25日（土）、本部から鈴木胖会長、会計幹事中前幸治先生をご来賓としてお迎えし、さらに基礎工学部電気工学科の卒業生の方にもご参加いただき、総勢10名と人数は少なめとなりましたが、広島市環境局中工場および中国電力株式会社絶縁油リサイクルセンターにおいて見学会を、また、かんぽヘルスプラザ広島において支部総会を実施しました。

当日はJR広島駅に集合後、バスで広島市中区にある広島市環境局中工場に移動し、職員の方のご案内で施設を見学しました。中工場は広島市中心部で出されるごみの大部分を処理する焼却場であり、H16年3月に旧設備に隣接した土地に建てられた国内でも有数の最新焼却場でした。施設内には焼却炉で発生する廃熱を利用して発電機により供給される電気を利用した焼却灰を減容するためのプラズマーアーク式の灰溶融炉があつたり、近隣の温水プールに温水供給するなどエコロジーで無駄のない設備でした。

続いて、広島市南区に建設中の絶縁油リサイクルセンターを見学しました。こちらの施設は、コンデンサーや変圧器などの絶縁油に使用されているPCBを分離・精製することで、PCBを含まない再使用される油と、PCBを多く含む少量の廃棄物とに分離するための設備





でした。設備は全て完成しており、ちょうど最終の使用前検査を終了したばかりであり、新品でかつ国内でもあまりない特殊な設備を見学することができました。

見学会終了後、総会会場であるかんぽヘルスプラザ広島へ会場を移し、支部総会を開催しました。総会は白髭支部長の挨拶から始まり、鈴木会長から濬電会、大阪大学工業会の動向など含めたご挨拶を頂き、会計幹事である中前先生からは母校の近況、濬電会の状況などについてご紹介頂きました。

続いて議事に入り、平成17年度の支部会計報告等および来年度総会を九州支部と合同で開催する件について提案し全会一致で承認いただき、総会は無事に終了しました。

その後、懇親会に移り、鈴木会長の乾杯の音頭により懇親に入り、少人数でありましたので和気あいあいと有意義な時間を過ごし、来年度の再会を期して散会となりました。

最後に、見学会でご案内頂いた中工場および絶縁油リサイクルセンターの職員の方、並びに今回の総会・見学会を開催するにあたりご助力いただきました方々に紙面を借りてお礼申し上げます。また、中国支部の会員の皆さんには、ご都合が合いましたら、来年度の支部総会に是非ともご参加下さいますよう、お願い申し上げます。  
(坪内光介(電子・平8)記)

## 平成18年度濬電会四国支部総会

四国支部では、平成18年12月9日（土）に、設備見学会と総会・懇親会を香川県で開催しました。前回、平成17年1月に実施して以来、約2年ぶりの開催でした。

当日は、小雨模様のあいにくの天気ではありましたが、本部より鈴木会長、三坂重雄副会長、北山研一

総務幹事をご来賓としてお迎えし、四国支部からは永田重幸支部長をはじめ16名の参加者を得ることができました。

JR坂出駅に集合した後、見学先の四国電力株坂出火力発電所にマイクロバスで向かい、まずPR館にて、発電所の概要や平成22年頃に予定されているLNGへの燃料転換計画について説明を受けました。その後、構内をバスで一周した後でタービン建屋に入り、稼働中のタービン・発電機・中央制御室を見学しました。さらに、現在建設中の新しい中央制御室も特別に見学させていただき、会員から「制御方式に、なぜ光を採用しているのか？」など活発な質問があり、有意義な見学会となりました。

次に、瀬戸大橋が一望できる宇多津町の懇親会場に移動し、総会と懇親会を行いました。総会では、坂本明雄幹事の司会で、永田支部長の挨拶から始まり、鈴木会長と三坂副会長からのご挨拶、北山総務幹事から母校近況報告を頂きました。

永田支部長からは、今回は総会だけでなく設備見学会を実施することとなった経緯および支部長を退任することとこれまでのお礼、鈴木会長からは、母校や濬電会本部の近況などについて、三坂副会長からは、他の支部での活動状況などについて、北山総務幹事からは、大学の組織変更の現況や来年度に濬電会の名簿を発行する予定であることなどを伺うことができました。

引き続き議案審議に移り、尾田より平成18年度の活動計画や予算、支部長交代等の議案を提案し、全会一致で承認されました。最後に、坂入修二新支部長が挨拶を行い、今後の支部活動に向けての抱負を述べ、総会は無事に終了いたしました。

総会の後、懇親会に移り、山下一彦元支部長の乾杯の音頭により、懇談に入りました。頃合いを見計らい、ご来賓の方も含め参加者全員による自己紹介と近況報告を行いました。皆さんお話し好きの方ばかりで、全員



が話し終わるころには、食事はデザートのアイスクリームになっていました。最後に、会員を代表して対尾準三郎さんの音頭で1本締めを行い、お開きとなりました。駅に向かうバスの中では、「来年はどこです？松山か高知か？」などの会話が弾み、大いに盛り上がらりました。

ご多忙の中、ご出席いただききました皆様方に感謝し、御礼申し上げます。（尾田牧弘（電気・昭57））

## 平成18年度濬電会九州支部総会

濬電会九州支部では昨年10月28日（土）に支部総会、見学会および懇親会を行いました。この支部総会も回を重ねること今年で15回目となりました。今回は、本部より会長の鈴木伸先生、副会長の三坂重雄様、総務幹事の北山研一先生にお出で頂きました。九州支部からは田中祐捷（気昭37）、三谷康範（気昭56）、上田啓史（気昭61）、服部励治（気昭61）、吉水清文（気昭62）、中村健一（気昭63）、高橋宏彰（気平3）、小杉成史（気平5）、田口彰（気平7）、渡邊政幸（気平13）、山本拓郎（気平5）、長尾孝信（気平8）、大門秀朗（子元平）が出席しました。



今回総会を開いた地は長崎で、7年前に一度集まつたことがあります。その時は遊覧船で船上から三菱造船所を見学して伊王島へ上陸しそこで総会・懇親会を持ちましたが、今回は造船所を直接見学させていただきました。その日は運よく日本最新鋭のイージス艦も見ることができ、また博物館では休日にもかかわらずご丁寧に説明していただき大変有意義な時間を過ごさせていただきました。写真はその博物館の前で撮ったものです。鈴木会長は、今回の造船所見学には色々と感慨深いものがあられたそうで、ご自身の体験に基づ

いて船にまつわる興味深いお話を聞かせていただきました。総会・懇親会は長崎市内の夜景を一望できる旅館・矢太楼にて行いました。総会の後、北山先生から母校のお話を聞かせていただきましたが、電気系の人気凋落の話がOBとしてやはり気になります。

今年は大阪で世界陸上が催されること。これを機会に大阪の景気回復を遠い九州の地から支部会員一同、お祈りしております。来年度以降も、会員皆様のご参加と協力ををお願いいたします。なお、今回の見学に際しまして三菱重工業㈱長崎造船所立神工作部主席技師の佐谷保幸氏には電気学会九州支部の役員というつながりだけで快くお引き受けいただきました。また、今回欠席の三菱重工業㈱永真司氏（気昭56）にも現地の細かいアレンジをしていただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。（服部励治（気・昭61））

## 平成18年度濬電会ゴルフ例会報告

濬電会ゴルフ例会は、平成18年度で102回の開催を誇る、濬電会内の親睦を図る伝統的なゴルフコンペで、昨年度は、春に三田市郊外の武庫ノ台ゴルフコースで開催されました。

コンペは、一般の部とシニアの部（満年齢65才以上）に分けて優勝を競われており、結果は以下のとおりとなりました。

第 102 回	
開 催 日	H18. 6. 18 (日)
参 加 者 数	2組5名
一般の部 優 勝	武智芳博（電61） gross 8 8 H. C. 6 Net 8 2
シニアの部 優 勝	西馬重幸（電28） gross 9 4 H. C. 4 Net 9 0



6月の梅雨の最中にもかかわらず、前日までの雨も嘘のような晴天に恵まれ、少人数ではありましたが和気藹々とした中にも真剣なプレイが見られ、ご参加いただいた皆様に最後まで楽しくプレイしていただけたと思います。結果、一般の部では武智さんが、シニアの部では西馬さんがそれぞれ優勝されました。

ゴルフを終えた会食の場では、表彰式の後、ご参加いただいた幅広い年代の皆様でご懇談いただき、ゴル

フ談義で盛り上りました。

なお、次回開催につきましては、滝電会役員会にて議論の結果、ここ数年の参加者減少もあることから当面見合わせることとなったことをご報告いたします。ゴルフ愛好家を代表して、近い将来再開できることを心から願っております。

(谷本 宏(電子・平元)・橘 俊郎(通信・昭61)記)

### 尾崎弘先生をしのんで

尾崎弘先生は、2005年夏、退院された直後にお元気な声を電話で拝聴し、安堵しておりましたが、その後再び健康を損なわれ、静養しておられたところ、その甲斐なく、2006年11月20日、86年の生涯を終えられました。筆者は、卒研で尾崎研究室に配属以来21年間、直接ご指導を仰いだ者として、ここに先生をしのばせて頂く次第です。

先生は、1942年大阪帝国大学通信工学科をご卒業後、工学部在籍のまま海軍技術士官、同学科助手、講師、助教授を経て、1962年創設間もない電子工学科教授に昇任されました。1983年定年退官と同時に大阪大学名誉教授の称号を授与され、1990年まで関西大学で教鞭を取られました。

この間、先生はひたむきな学究心とたゆまぬ情熱をもって教育研究に全力投球され、先生の門下から多数の優秀な研究者および技術者が巣立っております。特に、先生の回路理論の教育においては、情熱的な講義により学生から大きな人気を博し、さらには、回路構成理論の研究においては、懸念期から先導的役割を果たされ、世界に先駆けてRC回路構成理論や多変数正実関数理論を発表されただけではなく、世界一線級の研究者を育てられ、阪大、ひいてはわが国、の回路構成

理論の世界的レベルへの向上に大きく貢献されました。これらの功績により、電子情報通信学会から論文賞、業績賞、功績賞を、さらにはIEEE のCAS SocietyからGolden Jubilee Medalを受賞されました。

また、情報工学に関しては、啓蒙期から「フィスターの論理設計」の教科書や产学共同研究を通して、デジタル回路設計に関する先導的な教育研究に傾倒され、情報理論、計算機設計、集積回路設計の分野においても多数の秀でた研究者や技術者を育成されました。これららの永年にわたる教育研究への多大な貢献により、1994年春の叙勲において、勳三等旭日中綬賞を受賞されました。

先生は、産業界においても、電卓、自動改札機、集積回路等をはじめとする電子情報機器の研究開発に、その誕生期から大きく関与され、わが国の電子情報産業の発展に多大な貢献を遂げられました。その証左の一つとして、2005年にシャープ株式会社の電子式卓上計算機がIEEEマイルストーンとして認定されましたが、開発者の多くは尾崎研究室で研鑽を積んだ方々でした。また、2006年にIEEE歴史委員会は、尾崎研究室、近鉄株式会社、オムロン株式会社が共同開発した自動改札機をマイルストーンとして認め、IEEE ExComの最終承認を待つところとなっています。マルコニーの通信機やボルタの乾電池など、全世界の60余りのIEEEマイルストーンの中で、わが国からは7件が認定され、そのうち2件が先生のご指導によって開発されたものです。

先生は、機会あるごとに「論文を書け」、「本を書け」と檄を飛ばしましたが、そのたゆまぬ情熱は数多くの研究者や技術者に強い勇気と活力を与えられました。

ここに、長年ご指導頂いた者の一人として心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げる次第です。

(白川功 (電子・昭38・M40・D43、兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科長・大阪大学名誉教授))

## クラス委員

### (電気工学科・電気工学科目)

大正14年 久野 坪輝  
 昭和12年 落合 岩男  
 14年 石崎 長光  
 15年 東野 俊一  
 16年 高田 源次  
 20年 樋口 正樹  
 22年 山下 義美  
 23年 山中千代衛  
 24年 甲佐 史郎  
 25年 辻 良夫  
 26年 近藤 道治  
 27年 木本 保夫  
 28年旧 藤井 克彦  
 28年新 辻 三郎  
 29年 升田 公三  
 31年 寺崎 泰彦  
 32年 大川進一郎  
 33年 鈴木 胖  
 34年 白藤 純嗣  
 35年 松浦 虔士  
 36年 濱口 智尋  
 37年 黒田 英三  
 38年 山中 龍彦  
 39年 吉野 勝美  
 40年 赤澤 堅造  
 41年 辻 肢一郎  
 42年 佐々木孝友  
 43年 朴 炳植  
 44年 谷内田正彦  
 45年 織田 守昭  
 46年 土師 總一  
 47年 大森 裕  
 48年 原 格  
 49年 田中 和夫  
 50年 伊藤 利道  
 51年 木村 紀之  
 52年 山本 正純  
 53年 阪部 周二  
 54年 白神 宏之  
 55年 伊瀬 敏史  
 56年 三谷 康範  
 57年 裏 升吾  
 58年 尾崎 雅則  
 59年 江川 泰弘

60年 秋葉 龍郎  
 61年 服部 励治  
 62年 佐伯 修  
 63年 藤井 龍彦  
 平成元年 森 勇介  
 2年 仙井 浩史  
 3年 舟木 剛  
 4年 岩井 真  
 5年 藤田 和久  
 6年 板垣 鉄平  
 7年 川瀬 博基  
 8年 斎藤 貴光  
 9年 中島 弘朋  
 10年 矢野 雅一  
 11年 緒方 晋也  
 12年 山下 勝則  
 13年 小谷 研太  
 14年 大伏 雄一  
 15年 小島 鉄也  
 17年 村井 良多

### (通信工学科・通信工学科目)

昭和18年 藤澤 和男  
 19年 黒田 一之  
 20年 滑川 敏彦  
 21年 来住 徹  
 23年 伊藤 肇  
 24年 奥野 喜好  
 25年 竹内 信雄  
 26年 長岡 崇雄  
 28年旧 福井 淳一  
 28年新 未田 正  
 29年 由利 宏二  
 30年 倉橋浩一郎  
 32年 長谷川利治  
 33年 宮道 繁  
 34年 樹下 行三  
 35年 西原 浩  
 36年 野村 康雄  
 37年 真田 英彦  
 38年 中西 瞳  
 39年 塩澤 俊之  
 40年 藤岡 弘  
 42年 宮原 秀夫  
 43年 玉川 允敏

44年	池田 雅夫	50年	山田 伸一
45年	中野 秀男	51年	西川 博昭
46年	里村 裕	52年	中前 幸治
47年	森下 克己	53年	岡田 満哉
48年	河崎善一郎	54年	薮内 康文
49年	北山 研一	55年	太田 快人
50年	樺澤 哲	56年	出口 弘
51年	鬼頭 淳悟	57年	河合 利幸
52年	井上 健	58年	森 俊彦
53年	中野 幸男	59年	正田 博司
54年	馬場口 登	60年	綿森 道夫
55年	秦 淑彦	61年	森 伸也
56年	片山 正昭	62年	重弘 裕二
57年	榎原 博之	63年	藤村 昌寿
58年	山本 幹	平成元年	野口 栄治
59年	平 雅文	2年	赤堀 正樹
60年	原 晋介	3年	上野 隆範
61年	大川 剛直	4年	三浦 克介
62年	荒木 範行	5年	藤井 彰彦
63年	戸出 英樹	6年	上向井正裕
平成元年	堀井 康史	7年	上野 弘明
2年	松田 洋一	8年	梶井 博武
3年	畠 真司	9年	野田 研二
4年	上田 哲也	10年	島田 尚住
5年	安部田貞行	11年	藤澤 猛史
6年	村上 智己	12年	大竹隆太郎
7年	池田 武弘	13年	小野 俊明
8年	加藤 真	14年	三上 真範
9年	菅原 弘人	15年	樋渡 伸二
10年	中西 淳平	17年	尾島 正禎
11年	門田 行広		
12年	新熊 亮一		
13年	東野 武史		
14年	村越 昭彦	平成5年	一階 良知
15年	藤本 正樹	6年	安部 敬一
17年	山本 勇樹	7年	原 隆浩

(情報システム工学科・情報システム工学科目)

(電子工学科・電子工学科目)

昭和38年	白川 功	11年	中尾 太郎
39年	尾浦憲治郎	12年	工藤 祐介
40年	吉岡 信夫	13年	兼田 佳和
41年	鷹岡 昭夫	14年	義久 智樹
42年	打田 良平	15年	庄島 大基
43年	春名 正光	17年	野里 良裕
44年	藤原 秀雄		
45年	杉本 哲夫		
46年	谷口 研二		
47年	木 泰治		
48年	栖原 敏明		
49年	村上 敬一		

クラス委員の変更等ございましたら、 事務局まで  
隨時ご連絡下さるようお願ひいたします。

# 澁電会 プライバシーポリシー

澁電会では、会員の皆様から事業推進に際して必要最小限の個人情報をご提供頂き、同窓会活動に利用して参りました。会員の皆様の個人情報の取り扱いにつきまして下記の通りご案内致します。会員の皆様のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 保有する会員の個人情報と個人情報収集方法、利用目的

澁電会（各支部を含む）（以下、本会と称する）が運営上取得した下記の情報を個人情報として取り扱います。氏名、会員番号、卒業（修了）学部・学科・科目・研究科・専攻・コース・研究室、卒業（修了）年度、自宅連絡先（住所、電話／FAX番号、電子メールアドレス）、勤務先（勤務先名称、住所、所属部署、役職、電話／FAX番号、電子メールアドレス）等

また本会では、その会則に示す目的のとおり、「会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う」こととして、会員個人情報を以下に示す事業において利用します。

- ① 本会会員名簿の整備および発行。
- ② 本会および本会会員が主催する事業で本会の目的に適ったもの（総会、見学会、同窓会等）の案内およびそれにかかる連絡事項の送付。
- ③ 会報等（電子媒体によるものを含み、本会活動目的に適うものに限る）の配布。
- ④ 会費および寄付金の收受管理、会費徴収に関わる事務、案内。
- ⑤ 大阪大学が行う教育・研究の発展に寄与すると判断される大阪大学主催事業の案内送付。

## 2. 個人情報の管理と第三者への開示と提供

- (1) 本会が収集した個人情報については、本会により適正に管理を行い、常に個人情報の保護に努めます。
- (2) 本会は、前項①～⑤に示す事業推進において、本会から事業委託された業者等が対応することが適切と判断される場合には、業者等に対して必要最小限の個人情報を開示ならびに提供することができます。また、大阪大学ならびに大阪大学同窓会連合会等同窓会組織の主催事業で、その利用目的から個人情報の提供が適切と判断される場合には、大阪大学ならびに大阪大学同窓会連合会等同窓会組織に対して必要最小限の個人情報を提供することができます。なお、個人情報の開示もしくは提供を望まない場合は、本会まで届け出て下さい。届け出のない場合は、原則として「開示可・提供可」として取り扱わせて頂きます。
- (3) 本会から提供する個人情報は紙媒体もしくは電子媒体によるものとします。
- (4) 上記(2)および次の場合を除き、あらかじめ会員本人の事前の同意がない限り、個人情報を第三者へ開示ならびに提供致しません。
  - 法令に基づく場合
  - 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき。
  - 公衆衛生の向上又は児童の健全な育成の推進のために特に必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき。
  - 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対し協力する必要がある場合であって、本人の同意を得ることにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき。

## 3. 開示・訂正・利用停止請求

本会は、会員から会員本人の個人情報に関する開示請求の申し出があった場合は、当該本人と確認したうえで、その情報の開示を行います。また、内容が正確でないなどの申し出があった際には、その内容を確認の上、必要に応じて個人情報の追加、変更、訂正または利用停止を行います。

## 4. 澁電会に関する個人情報のお問い合わせ・ご依頼先

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学 大学院工学研究科 電気系内 澁電会事務局

電話 06-6879-7789 FAX 06-6879-7774 E-mail reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

# 澪電会 会則

## 会 則

第1条 本会は澪電会と称する。

第2条 本会は事務局を大阪大学大学院工学研究科電気系内に置く。

第3条 本会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う。

第4条 本会の会員はつぎのとおりとする。

### (1) 正会員

イ. 大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科ならびにその前身である学校の電気系卒業生。

ロ. 大阪大学工学部および工学研究科の電気系教官。

ハ. 大阪大学工学部電気系教官主査のもとで学位を得た者で、本会に入会を希望する者。

二. 特に本会に縁故があり、役員会の承認を得た者。

### (2) 特別会員

正会員以外で大阪大学工学部電気系の教授、助教授および講師であった者ならびに特にこの会に縁故のある者。

### (3) 学生会員

大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科の電気系学生

### (4) 賛助会員

本会の活動を援助する法人または個人

第5条 本会に次の役員、委員を置く。

会長 1名

副会長、幹事、クラス委員

第6条 会長は総会の議を経て選出する。副会長、幹事については会長が指名し、総会で承認を得る。クラス委員については学科別卒業年度別に選出する。

第7条 会長は本会の会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐する。

第8条 会長、副会長、幹事は役員会を組織し、会務を処理する。クラス委員はクラスを代表し、本会に関する重要事項の相談にあずかる。

第9条 役員会の推薦により、本会に顧問を置くことができる。

第10条 役員の任期は2年とする。ただし、重任はさまたげない。

第11条 定期総会は年1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。定期総会では事業報告、会計報告および役員改選その他の議事を行う。

第12条 本会の事業年度、会計年度は毎年6月1日に始まり、翌年5月31日に終る。

第13条 正会員は別に定めた規定により、会費を毎年7月末日までに納入しなければならない。

第14条 本会は必要に応じて支部を置くことができる。

第15条 本会則の変更は総会の議を経て行う。

## 細 則

・会費は年額4,000円とする。

(平成7年度より実施)

・大学学部卒業時から53年を経過した会員は、会費の納入を要しない。

## 平成18年度 講演会・総会・懇親会



辻毅一郎先生 ご講演  
「需要家サイドから見えたCO2排出削減」



佐々木孝友先生 ご講演  
「新結晶と産業にもたらすもの」



総会での会長挨拶



懇親会のひとこま

## 見学会



関西電力株舞鶴火力発電所にて

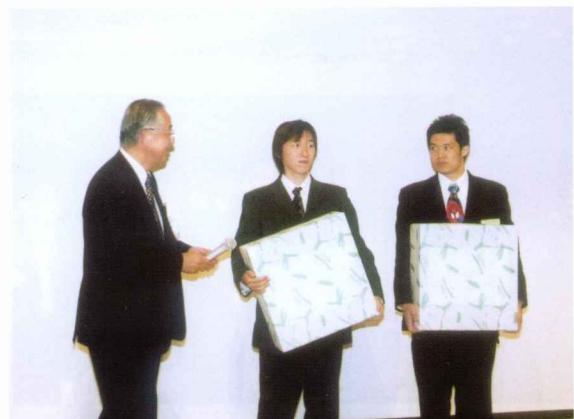
# 平成18年度 卒業祝賀・謝恩会



会長 祝辞



乾杯



工学賞 受賞者表彰



先端通信エキスパート養成プログラム最優秀研究課題 表彰



餅つき風景



卒業生代表 大森崇史君 挨拶



藤井克彦先生 万歳三唱

## 編集後記

会報濱電No. 28をお届けいたします。個人情報保護法が施行され、個人情報保護の観点から名簿の発行を見合わせていましたが、本号に掲載されていますように、濱電会のプライバシーポリシーが決まり、今年中には名簿発刊の予定です。現在、会報の編集は、電子メールで会員の皆様から情報・原稿を収集し、電子ファイルで印刷屋に渡す、という作業で行われています。本号を編集するにあたり、創刊号か

ら読み返してみましたが、以前の編集作業には非常に多くの時間と労力とが費やされていた想像されます。創刊号にあります西原浩先生の「濱電会会員名簿発刊事業での悪戦苦闘をふりかえって」を読み、つくづく、そう感じました。

最後になりましたが、ご多用中にもかかわらず、快くご執筆いただいた皆様方に心よりお礼申し上げます。  
(編集幹事：佐伯修、森伸也)

## 会員業務の一部外部委託および名簿発行のお知らせ

濱電会では会員データベースおよび会費の納入状況管理業務に対して主として学生アルバイトで対応して参りましたが、平成17年4月から「個人情報保護法」の全面施行により、氏名、住所、電話番号等の個人情報の取り扱いをよりいっそう厳密に行う必要が出てまいりました。これに伴い濱電会では会員情報の取り扱い方法を検討してまいりましたが、適切な業者に会員の個人情報管理の委託を行い、信頼性を一段と高くすることにいたしました。委託業者は同窓会の名簿管理について多くの実績があり、かつプライバシーマークを取得している小野高速印刷（株）とし、会員データベース管理および会費納入状況の管理を委託いたしました。会員各位のご理解をお願いいたします。

なお、一時保留しておりました名簿発行を平成19年度に行うことで準備を進めておりますが、これに伴う会員データベースの整備について小野高速印刷（株）を通じて調査を行うこととしております。ご協力のほどよろしくお願ひいたします。また、会員名簿の配布は今回より希望者に限定することといたしました。

名簿担当幹事 伊瀬敏史

発行 濱電会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1  
大阪大学大学院工学研究科電気系内  
電 話：06-6879-7789 (ダイヤルイン)  
ファックス：06-6879-7774  
電子メール：reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp